

明日の岩泉へ

東日本大震災 岩泉町復興の記録 その1

明日の岩泉へ

東日本大震災 岩泉町復興の記録 その1



岩泉町

第1章

岩泉のまちを愛して

岩と山、森と高原、水と海、街道とまち——

岩泉のまちは、畏れや親しみ、懐かしさ、荒々しさなど

自然と人との関係を幾重にも表現しながら

ここに暮らす私たちがかけがえない生活の舞台

岩泉のまちを愛し、岩泉のまちに暮らす

岩泉は「岩と山」のまちである

岩泉のまちは

美しい岩肌を見せる急峻な山に囲まれたまちである

まちの心臓のように座る宇霊羅山は

アイヌ語で、「霧のかかる峰」という意味だとか

立ちのぼる深い霧が

その峰を覆い、そしてまた晴れる時

石灰岩の断崖絶壁がその白い姿をあらわす

岩泉は「森と高原」のまちである

岩泉は、本州随一の広さを誇るまちである

まちを囲む山々の深い森は

この広いまちの基幹産業のひとつとして歴史を紡いだ

シイタケやマツタケ、山菜

四季折々の産物に恵まれている

盛岡と岩泉を隔てる早坂高原は



カタクリ、レンゲツツジ、ノハナシヨウブなど

季節の花々が咲き誇り、シラカバやブナの林が自慢の自然公園
放牧される短角牛は、

いま、まちの産業を支える景観をつくる

樹齢500年以上を数えるシナノキの巨木は

岩泉を訪れる人をその樹影に迎え入れる

岩泉は「街道」のまちである

岩泉のまちを東西に貫くのは、国道455号、旧小本街道である
うねうねと曲がりながら、盛岡と小本の海をつなぐ

塩や海産物、たたらで造られた特産の鉄を牛の背にのせて

盛岡の産品と交換して運んだ街道

「牛追い街道」とも呼ばれていた

道中の難所を乗り切る「南部牛追唄」が唄われた街道である



岩泉は「水」のまちである

岩泉の山々は、清冽な水を生み出す

宇霊羅山が抱える鍾乳洞・龍泉洞から湧く水は

「食のオリンピック」といわれる世界のコンクールで

そのおいしさにお墨付きをもらった

この水は、清水川溪流としてまちを流れ

やがて小本川に合流して太平洋にそそぐ

小本川の上流、大川には

山岳溪流の景勝地・大川七滝があり、

まちの北部を流れる安家川には

清流だけにすむ町指定天然記念物カワシンジユガイも生息する

川と街道は連れ添いながら流れて

昔から今にいたるまで、旅人の歩みをなぐさめている

厳寒のみずまつりで私たちは

水の恵みを感謝し

水の恵みを祈る



岩泉は「海」のまちである

小本は岩泉の海の玄関口

広大な岩泉のまちは、この小さな漁村、小本で太平洋に向き合う海に向かって左手に見える龍甲岩は

この漁村のランドマーク

南に突き出た半島は、景勝地「熊の鼻」

展望台から茂師の青い海を下に見ながら

赤松の林と岩に碎ける白い波を堪能できる

荒れる海、穏やかな海 さまざまの顔をもつ大切な海

海は私たちの生活を支えている

平成23年3月11日、海は突然このまちを襲った

海は堤防を越え、家々を押し流し、まちを破壊した

流れていくまちを声もなく見守りながら

私たちは、それでも、海を捨てないことを心に誓った

海は生涯の友人

私たちは海を愛している



岩泉は「伝統と新しい文化が交錯する」まちである

岩泉の歴史は

古来このまちにたくさんの方が往来し

ものや情報を伝えていたことを教えている

まちはこの人たちとともに

新しい文化の吸収に熱心に取り組んだ

農業や酪農における新しい商品の開発

新しい品種の育成

新文化の息吹を伝える建物 などなど

その一方で、まちは頑固に伝統を守った

七頭舞、念仏舞、鹿踊り……町内各地にそれぞれの舞があり

うれしいとき、楽しいとき、決意を新たにするとき

私たちはこれを舞う

伝統の味を守る菓子作りも、伝統の手仕事を伝える工房も

造り酒屋の蔵も、海外の輸入品を扱うブティックも

それぞれの明日に向かって歩く



第2章 被災

平成23年3月11日

14時46分頃…地震発生

震源地…牡鹿半島の東南東約130km付近

地震の規模…マグニチュード9.0(暫定値)

震度…4/岩泉(計測震度4.2)

14時49分…岩手県沿岸に大津波警報発令

14時50分…防災行政無線で避難指示

15時28分頃…津波最大波到達

津波遡上高…小本20.4m

茂師24.6m

浸水区域面積…小本・中野地区約125ha

茂師・小成地区約6ha



予想をはるかに超えた大地震・大津波は、その一瞬を境に多くの人生を一変させた。その時、家族は、職場では、学校では、町では、何を思いどう行動したのか――

家族は

◆家族はそれぞれの場所にいた

津波が来るので船を避難させるため、沖に出るまで30〜40分かかったが、津波が来る前に沖に出たので津波は感じなかった。漁業無線で釜石の市場が冠水したと分かったが、それ以降無線が止まってしまい陸との連絡はできなくなった。

小成・茂師・小本から全部で、12〜13隻の船が沖に出た。船に2晩泊ったがまったく眠らなかった。船に食糧やカップラーメン、水などを積んでいた。2日目の朝、組合の漁業監視船が出て陸と連絡も取れおにぎりが配

られた。暗くなる前に陸に火事が見えたので小本は全滅したかと思った。津波警報が解除になった3日目の昼に家に帰った。娘がいらないことを聞いたが、見つけるだけだと思っていた。

妻は自宅に居た。停電になり電話も携帯電話も使えず家族と連絡が取れなかった。子どもは娘3人。長女は宮古のローソンに勤めていて、みんなと一緒にだし、ちょっと国道に逃げればすぐに田老の道の駅の避難所があるので大丈夫と思っていた。帰って来たらお腹が空くだろうと、おにぎりやパンなどを解凍して待っていた。おじいちゃんが「探しに行くべし」と言うので、そこで初めてだめだと思った。

被害家屋(住家)数(2012年1月17日現在)

被害程度	棟数	備考
全壊	177	流失 80・全壊 97
大規模半壊	10	
半壊	13	
一部損壊	8	
合計	208	

死亡者数(2012年1月17日現在)

被害場所	人数
小本	4
田野畑村	1
宮古市田老	4
宮城県石巻市	1
関連死	1
合計	11

ローソンはオーナー夫婦とおばあさんと従業員3人の6人全員が亡くなった。長女は1週間後、早い発見で娘だとわかる状態で見つかった。ローソンは全部流され看板だけが残っていた。「なんで残っているのか」とすごく憎らしかった。「渦を見た」と言う人がいる。北と南からの津波が合流したのだ。田老町は防潮堤に安心して油断していたのかもしれない。避難していれば犠牲者はいはずだ。

……金澤晃さん由江さん夫妻（小成）

◆妻、娘、犬は車に閉じ込められ、

一晩過ごした

災害時はそれぞれ逃げることになっていたが、娘から「今行くから」と電話があり、私（ツイさん）は自宅で娘の帰りを待っていた。戻って来た娘が車に乗り込んですぐに津波が来

た。敷地内の作業場の屋根と壁に覆われる形で車に閉じ込められ、娘と犬とで一晩過ごした。車の後部窓が割れ、積んでいた毛布が濡れ、寒かった。外の状況が分からなかったが、ドーン、ドーンという音は津波が作業場に当たった音だったようだ。裏の保育園の先生たちの車もすべて流された。翌朝、人の声があったのでクラクションを鳴らして助けてもらった。

宮古にいた夫は2時間かけて家に戻ったが、妻と娘の乗った車は倒壊した作業場の中にあつたため、夜中まで探したが見つけれなかった。

……三浦康征さん、ツイさん夫妻（中野）

◆おんぶ紐を輪に通そうとするのだが、

手が震えて通せない

長男（5カ月）を昼寝させようとした時、大きく揺れた。警報より先に携帯電話が鳴り、テレビ画面に緊



国道を走り迫る津波



水門を越え流出する津波

急地震速報が大きくてた。哺乳瓶をゴミ袋に入れ、病院通いのバッグと1泊分の着替えを入れたバッグを準備した。ストローを消し、車を家の前にまわし、長男を背負い、おんぶ紐を輪に通そうとするのだが、手が震えて通せないのもそのまま車まで歩いた。車のベビシートにもうまく座らせられず、後部座席に寝かせて毛布をかけた。長女は、小本幼稚園の先生を信じて、自分では迎えに行かず、向かいの家の人に頼んだ。小本トンネルの避難場所へ15分後には到着し、長女に会えた。

……金澤章子さん(小本)

職場で

◆車ごと流され、車の窓から脱出

雷のような音が何度も聞こえた。津波が堤防にぶつかる音だったよう

だ。道路沿いに港に向かったパトカーが、すごい勢いで戻って来るのが見えた。「逃げる、逃げる！」という慌てたアナウンスで、津波が来るのが分かった。小本温泉の裏側に社員寮があり、2日後に帰国する予定の、インドネシアの研修生がいたが、彼らは自転車で工場まで逃げて来た。交代勤務で寮に戻っていた日本人社員が2人、車で逃げようとして車ごと流され、車の窓から脱出、

一人はタイヤにつかまって助かった。もう一人はどうしても安否が分からなかったが、2階建ての建物のベランダで一夜を明かしていた。その社員は翌日消防団に助けられた。

……岩手アライ株式会社工場長 小松義和さん

漁協で

◆漁港が壊れ、40センチの地盤沈下



小成トンネル前に打ち寄せたがれき



破壊された家々

撮影：山口有稀音

地震発生時は事務所にいた。揺れがひどく、とりあえず外に避難した。

停電になり、テレビは見られないが、

漁業無線で大津波警報を知り、茂師の高台に避難し、そこで津波を見た。

引き波で船が流されていくのを見た。第2波がすごかった。夜になって事務所の確認に行き、津波を免れたことが分かった（消防団に無理を言って通してもらった）。両側は浸水したのに駐車場も水をかぶらなかつた。そばにある小さな川の水が遡ったのではないか。

一番大きな影響は漁港が壊れたこと。地盤沈下も40センチほどあった。小本は外洋なので、台風など来るとすぐ船を移動する。小さな船は今ままで海岸に置いていたが、今は自宅まで運び保管している。

…小本浜漁業協同組合専事 金澤良彦さん

農場で

◆餌が来なかつた

有芸は震災時1日だけ停電した。豚舎のひび割れがあつたが倒壊はしなかつた。実害は餌が来ないこと。車が沿岸部の運送会社に全部出てしまい、餌を運ぶ車がなくなつた。豚は百パーセント飼料で育つ。餌を節約しているうちに母豚がみるみる痩せ、虚弱な子が生まれた。発育が悪く死んだり肺炎になつたりした。

…養豚業 高橋真二郎さん(水堀)

◆ライフラインが3日間ストップ

震災時はヨーグルトを製造中。3日間ライフラインが総てストップした。電気が復旧した後は、人海作戦で農家から生乳を集めて商品化し、流通が正常に戻るまで、盛岡まで出張販売するなどして顧客の要望に応

農業・水産業・商工業の被害状況

農地	水田に海水が流れ込み、4cm近い泥が堆積し、取水口が破壊された。
漁港	小本漁港施設：約11億5千万円
	海岸保全施設（防潮堤、水門1基、門扉2基ほか）：約5億7千万円
漁船	登録漁船292隻中266隻、92%の漁船が被災：約4億4千万円
漁業	水産施設：3億9,400万円
	定置網：1億5千万円、川留漁具一式：3千万円、個人施設21個所：4700万円
	養殖施設93台：約2千万円
	水産物（養殖わかめ89ト：3千万円、養殖コンブ20ト：3千万円）
被災地の事業所数	小本地区合計72

岩泉町「東日本大震災記録 復興への足跡」（平成24年3月）

えた。……岩泉乳業株式会社

代表取締役社長 山下欽也さん

消防団で

◆目の前に波が迫り、間一髪で逃げた水門閉鎖は7分団1部、2部の仕事である。川の水門は閉まったが、山寄りの水門は遠隔操作がまったたく効かず閉まらなかったため、団員4人が水門に行った。バッテリーが上がり自家発電装置が動かずエンジンスタートができない。バッテリーを調達して水門を閉めようとしたが、目の前に波が迫り、間一髪で逃げた。頭から波をかぶった人もいた。水門を閉めに行った4人は車で走っていたので、津波の後、遠隔操作室のカメラで彼らの車を確認できず心配したが、4時間後無事に戻ってきて安心した。

避難誘導では今回の地震が普通の揺れではなかったもので、誰もが尋常ではないと思って避難した。元の避難場所は小本小学校と八幡宮だったが、1年前の検証で小学校も水が来るといふことで、トンネルの入り口に変更した。小学校の体育館は冠水。町が国道に出られる緩い階段をつけたので、児童が避難できた。避難行動は見事だった。保育園は冠水したが、職員が園児を連れて北に上がり、一人の犠牲者も出なかった。

……岩泉消防団第7分団

副分団長 早野善彦さん(小本)

◆家族や店のことよりもまず

水門を閉めようと思った

地震の時は店で仕事をしていた。消防団に入っているので、すぐに水門を閉めに行ったが閉まらなかった。最後まで水門にいた人たちに無



被災直後の消防団の活動



壊滅的被害

線を渡そうと屯所に取りに行きポンプ車に乗って届けようとしたが、水門の下から水がぶくぶく出てきて間一発で津波から逃れた。水門を閉めれば大丈夫と思っていたので、家族や店の安否よりもまず水門を閉めようと思った。店と自宅は流されたが、家族は高台のトンネルに逃げたので無事だった。

……有限会社山口屋 山口守さん(小本)

ホテルで

◆水道管がずれて1階が水浸

ツアー客のお迎えの準備をしている時に地震があった。龍泉洞に行っていたツアー客は宿泊せずに帰った。揺れがひどく、水道の配管がずれて、水が1階に流れ出て水浸しになり、すぐに停電した。

……ホテル龍泉洞愛山 常務取締役畠山耕太郎さん

保育園、学校で

◆誰も泣かずに歩いた……保育園

揺れが来た時何も情報はなかったが、副園長の判断で防寒具を着てすぐに避難所に向かった。津波が来る前に到着した。避難所までの坂を考慮して、カートは使わず2歳児2人を両手につないで歩いた。途中でお迎えの保護者が来て、着いた時に残っていた園児は数人だった。最後に残った園児にお迎えが来た時に、「津波が来るぞ」という声が聞こえた。子どもたちも先生の様子から緊張して誰も泣かずに頑張っていた。保育園は15メートル位まで水が来たようで、おもちゃなどグチャグチャになった。通勤用の車は流された。

……町立小本保育園保育士 久保居幸恵

公共施設の被害状況

(単位：千円)

施設名	被害金額・内訳
役場小本支所	32,750
防災行政無線	18,000
老人センター	1,263
窓口証明システム	861
小本保育園	46,899
茂師トイレ	1,500
公営住宅	30,000 小本団地(3棟7戸)
小本消防屯所	16,638 消防格納庫壁など破損

施設名	被害金額・内訳
小本小学校	69,237 ・校舎1階928㎡ 屋内運動場692㎡床上浸水(土砂流入) 損壊/屋外運動場7,340㎡ 浸水(土砂・がれき流入) 損壊
小本中学校	169,369 ・校舎1階部分1,127㎡ 床上浸水(土砂、がれき流入) 損壊/屋外運動場14,019㎡ 浸水(土砂・がれき流入) 損壊
小本中学校教員住宅	37,768 3棟計180㎡全壊
小本中学校プール	126,000 上屋付プール700㎡全壊

岩泉町「東日本大震災記録 復興への足跡」(平成24年3月)

◆2年前に出来た階段を上って避難
……小学校

5時間目の途中だったが、携帯電話が鳴って、震度4強の揺れが来た。机の下に避難した後、校長判断で津波避難とし、帰り仕度をして指定避難場所に向かった。6年生は外で体育の授業中だったので、教室に戻れずにそのまま避難した。子どもたちは動揺して泣いている子もいた。学校はハザードマップでは浸水区域になっている。

当時の生徒数は88人。家を流された生徒は24人。職員の被災も2人。災害時の準備は1年前の地震以来、年4回のワークシヨップに出ているので、落ち着いて判断できた。震源地が三陸沖ならば5〜10分、宮城県沖ならば15〜20分と言われていたが、電話もつながらず電気も消えて情報

はなかった。トンネル脇に到着して避難完了は午後3時13分だった。

2年前にできた階段を通って指定避難場所に向かい、国道を渡るのは消防団が誘導してくれた。防災無線で、情報も入ってきた。避難場所の消防本部集会所から中島公民館までバスで2回に分けて移動し、校長が着いたのが午後6時過ぎで、最終点呼をして保護者に引き渡した。午後8時頃の時点で残っていた子どもは20人くらいだったと思う。その後、町民会館に移動し、翌日の昼までには全員、保護者に引き渡した。

校門脇にあった二宮金次郎の銅像が倒れて、がれきを止めてくれたので、校舎内は1階に泥水が入っただけで済んだ。泥水は体育館に4センチ、教室に20センチ程度溜まっていた。

……町立小本小学校校長 太田勝浩さん



小学生の足で上りやすい段差の低い階段。
高台へ直接上られる



小本小学校前に押し寄せたがれき

◆全生徒の安否確認が出来たのは4

日目……中学校

震災翌日の3月12日に卒業式を予定していたので、生徒は下校しており、学校に残っていたのは職員のみ。地震後すぐに停電になり電話も通じなくなりました。防災無線も止まっていた。卒業証書をビニールに包み、書棚の高いところに入れて避難した。

車を置いて学校前の白山神社に避難したところ、近隣の住民も避難していた。消防団員がきて大津波警報が出ているので、もつと上に避難するように言われ国道を上がった。

その後、町のワゴン車で陸中サービセンタ―までピストン輸送で避難した。そこには自家発電がありテレビで津波の状況を知った。中学校の職員住宅が流され、自分（校長）の家も流された。

町民会館に着いてから、消防団から情報を得るなどして生徒の安否確認をした。3月11日の夜に10人以上の生徒の安否確認ができなかった。全員の生徒の安否が確認できたのは4日目であった。生徒は家族も含めみな無事であったが、職員は一人、父を陸前高田で亡くしている。

……町立小本中学校校長 小野佳保さん

◆各地で活動していた生徒の安否確

認……高等学校

学校では入試の事務処理中で、午後からは十数名の部活動の生徒がいた。校舎に被害がないか何度も確認したところ、体育館の天井板のずれが判明。保護者が迎えに来た場合は帰宅させた。一番大変だったのは、陸前高田を含め各地で活動していた生徒の安否確認だった。

……岩手県立岩泉高等学校副校長 菅野慎一さん

県立岩泉高等学校関係被害
(生徒数 205人)

被害状況	人数
住宅全壊・流出	5
漁港流され仕事不能	11
死亡	0
住宅全壊半壊等した職員	3
合計	19

岩泉高等学校インタビュー

岩泉町立小本中学校保護者
被害状況 (生徒数 51人)

被害状況	人数
全壊・流出	6
漁船流失	5
職場全壊	3
解雇	3
合計	17

岩泉町立小本小学校『記録大津波から復興へ向けて～2011「小本は負けない」～』



被災した小本中学校屋内プール

町役場



◆情報収集と避難者優先の対応

岩泉町役場大川支所長 **田鎖英明** (当時の防災担当)

役場庁舎はすぐ停電したが、小型発電機を作動し、総務課の電源を確保してテレビで他の地域の状況を見た。宮古市の市街にある「シートピアなあと」の映像を見て、小本も同じ状況かもしれないと思った。その後、写真で小本の状況を把握した。午後4時半位のことだと思う。県の水門の遠隔管理棟で撮った写真も見た。指定された避難場所に一時避難者がいるという情報が入り、車を手配した。国道455号は流出物が散乱して通過できなかったため、小本大橋からすぐの河川堤防を走り駅前に出てくるようにした。防災行政無線は通話が可能だったので、避難者がどこに何人行ったかという情報を受けた。小本小学校大牛内分校に避難者を集約した。同校舎はソーラーパネルがついているのでテレビで震災の状況を見た。町民会館は元から避難所になっているが、町長の判断で龍泉洞温泉ホテル、ホテル龍泉洞愛山も避難所とし、町のバスでピストン輸送して被災者を運んだ。人海戦術である。夜にかけて避難者の情報確保にあたった。発災当日、小本の行方不明者は5人に絞られた。

JA



◆とりあえず現金が必要

新岩手農業協同組合岩泉支所 支所長 **大久保裕勝さん**

発災当日は金曜日で事務所に勤務していた。地震後、すぐ通信が途絶えた。端末は動かなくても「現金は必要になるだろうな」と思い、紙ベースのデータを準備し、一人当たりの払い出し限度額を決めて営業に備えた。

何も持たずに避難した方のために、印鑑や通帳がなくても、面識や情報照合などで払い出すことにした。電話も不通で、被災者は窓口が開いていることも分からないだろうから、お金が払い出せることを知らせるために、避難所にポスターを貼り「JAは開いている！」ということを伝えた。

当町では人的被害は少なかったが、建物の被害が多く、損害査定は困難が予想された。住宅地図のコピーをとり共済契約物件をマークし、お客様対応の準備をした。JAとしては、共済金の迅速な支払いのために被災地を歩き、ここから先は“全壊”とする「全壊ライン」という線を地図上に引いた。

「一日も早くお客様を安心させよう」というのが最優先課題だった。

第3章

避難所の生活

3月11日、町内に10カ所の避難所が設置された。

その日から仮設住宅に入るまで、あるいは修理した自宅に戻るまで、不安と困難を抱えながら避難所で生活することになった。



子どもを連れて

◆離乳食を始められなかった

……大牛内分校・龍泉洞温泉ホテル

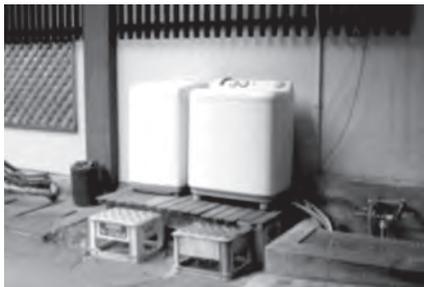
生後5カ月の子どもがいたので、消防署の車に先導されて大牛内の避難所に移動した。国道45号はがれきで通れず、別の道を通った。避難所である小本小学校大牛内分校では毛布が一人2枚支給された。だるまストローブもあって暑いくらいだったが、子どもが泣くと周りに悪いので、ストローブを離れて寒いところで過ごすこともあった。4月から小学校に入学する予定の長女は、避難所で友達と一緒に、かえって元気だった。長男の4時間おきのミルクに苦勞したが、役場の人や地元の人から心配してくれた。大牛内のおかあさんたちが、ミルクや紙オムツを用意し

てくれていた。

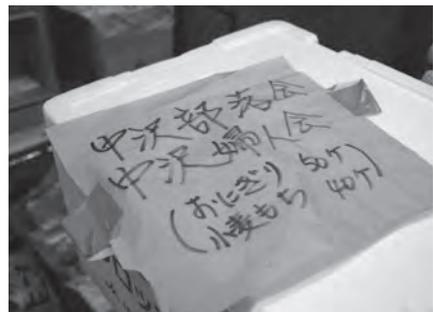
分校に2泊してから、元看護師さんの勧めで龍泉洞温泉ホテルに移動した。仮設住宅に入るまでの2カ月以上をそこで過ごした。他の人たちは大広間などに入ったが、自分たちは家族だけで個室に入ることができ、家族風呂も使えた。

夫は消防団員なので中島集会所に2週間泊まり込みとなり、家族の元にはたまにしか帰ってこなかった。

龍泉洞温泉ホテルはガスも水もトイレも使えたが、調理場に入れないので、哺乳瓶の煮沸ができず熱湯消毒をした。避難所にいるときに、長男が離乳食を始める時期を迎えたが、自分で調理ができないためお粥を煮ることができなかった。レトルトの離乳食があると言われたが、初めて口にするものは本物がいいと



避難した人たちが使用した洗濯機
避難所当時は3台設置



町内の婦人会から、おにぎりなどの支援も届いた

避難所

◆ 発災から5月末日まで延べ 8,900 人以上が避難

龍泉洞温泉ホテル 支配人 打野武彦さん



◆ バスに乗った被災者が次々に到着

3月11日の夕方5時ごろ、町から「避難する人たちを受け入れてほしい」と連絡があり、町のバスで避難者が次々と到着した。中には波をかぶり濡れた人もいた。電気の止まった寒い館内、少しの明かりと僅か2台の石油ストーブを囲み、帰宅できない宿泊者も含め、200人余りの方々と不安な一夜を過ごした。

当日ホテルには米の備蓄があり、他の避難所へもおにぎりを届けることができた。数日間はおにぎりだけの食事だったが、避難者自ら地元を回り、状況を知った農家、企業の方々から食材の援助をいただいた。とてもありがたかった。

◆ 宴会場を木材パネルで仕切った

宴会場は当初雑魚寝の状況だったが、秋田県から木材パネルをいただき、20区画以上に仕切ることができた。わずかではあるがプライバシーの保護もできたと思う。洗濯は、洗濯機を3台置いてラウンジに干す場所を作った。

電気が復旧してからは、入浴することができるようになり、町内ばかりでなく、隣村からの入浴も受け入れることができた。5月31日を最後に、避難していた方たちは仮設住宅に移られた。

避難所

◆ 3月13日から避難所となる

ホテル龍泉洞愛山 常務取締役 畠山耕太郎さん



◆ まったく予想していなかった避難所としての役割

町から「避難所になってほしい」と連絡があったが、まったく予想していない事態だった。3月13日から毎日130人余りを受け入れた。家族ごとに客室に入っていたのでプライバシーも守れたと思う。食材がないため食事の用意はできず、町民会館でボランティアの人たちが炊き出しをしたおにぎりなどをお出しした。3日後には電気も復旧し水道も出たので入浴もしていただいた。

3月21日には避難所としての役割を終え、避難者は龍泉洞温泉ホテルに統合された。避難所の役割を終えても風呂の提供を続けた。田野畑村からはマイクロバスで入浴にきた。岩泉の人たちにも提供し、町民会館の避難者もご利用いただいた。

思ったので、仮設住宅に入るまでお粥を食べさせることができなかつた。

……金澤章子さん(小本)

◆妊娠9カ月のからだを気遣ってもらった……町民会館へふれあいランド岩泉コテージ

津波警報を聞いて避難場所に逃げた。そこにいた役場の人と保健師さんがからだを気遣ってくれて、誰よりも先に町民会館に移らせてもらった。ストーブが数カ所しかなく、寒いという人もいたが、自分は妊婦なので暑かった。畳敷きで、2枚の毛布を敷布団と掛け布団のかわりにした。ぎつちり満員の雑魚寝で腰が痛かった。

町民会館に2泊した後、ほかの避難所に移ったほうがよいということ、ふれあいランド岩泉のコテージに入った。「コテージに移ってから

も食事は町民会館に食べに来てください」と言われたが、ガソリンが手に入らないので行くことができなかつた。自炊するにも食材が手に入りにくく、道の駅でお米をもらった。

……三浦爾美さん(小本)

夫婦で

◆4カ所の避難所を移動

……大牛内分校へホテル龍泉洞愛山へ町民会館へ龍泉洞温泉ホテル

自分(康征さん)は大牛内分校の避難所に行き、妻と娘は救助された後、中島の避難所に行った。互いに探し合い、会えたのは12日の昼頃だった。大牛内の避難所は学校の分校で、廃校になっても老人ホームとして使えるようになっていた。だるまストーブがあり助かった。地域の人たちが炊き出しをしてくれ、汁物も出



支援物資の仕分け



避難所から片付けのために自宅に通う

避難所

◆炊き出し拠点としておにぎりを作る

岩泉町役場職員(当時) 佐々木和子さん



当時は町役場の職員で、3月31日に定年退職を迎えることになっていた。女性職員の年長者ということで被災者の給食担当を任せられたのだと思う。

3月11日は、対策本部の指示により午後5時頃には町民会館に行き、停電の中、町の女性職員や社会福祉協議会の職員など約40人で1,800個以上のおにぎりを作った。あらゆる鍋を使って何回も何回も米を炊き、1個でも多くのおにぎりを被災者に届けようとみんな必死で作った。その日から、町民会館が炊き出しの拠点となり、消防団やほかの避難所の被災者のおにぎりも作った。4日目頃には朝だけだったがおみそ汁を出すことができた。

消防団の下部組織の婦人防火クラブや地域振興協議会の人たちも交代で手伝いに来てくれた。支援物資が届くまでの間、米や野菜、梅干しやのり等が不足すると地域の人たちが家から持ってきてくれた。言葉に言い表せないほどのありがたさと町民の絆の深さを感じた。3月11日から17日までの1週間で作ったおにぎりは3万個を超えた。

関係機関

◆福祉避難所として高齢者などが避難

岩泉町社会福祉協議会 事務局長兼地域福祉課長 漆真下進さん



左から事務局長 漆真下進さん、地域福祉課 巖野早織さん、地域福祉課長補佐 下向伸明さん

町の要請で3月11日の夕方からデイサービスどんぐり苑は福祉避難所として、小本からの利用者をはじめ、停電で自宅で介護ができなくなった高齢者や障がいのある人などに入っていた。

ボランティアについては町長の要請で災害ボランティアセンターを設置した。各避難所をまわって、必要な作業を聞いたり、ホワイトボードにボランティアの依頼を書き出し、集まったボランティアを配置するなどした。町からボランティア用にバスを出してもらったりもしたが、基本はガソリンも食事も手弁当のため、途中、ガソリンが不足のため通うことができず、ボランティア活動が途絶えることがあった。

ボランティアの仕事は、被災した家屋の泥出し、石灰まき、自宅に戻る被災者の家の掃除、仮設住宅への移動のお手伝い、龍ちゃんドームに集まった支援物資の運搬、仕分けなど、時期によって変わった。

た。

12日の昼には支援物資が届いた。大牛内分校に2泊した後ホテル龍泉洞愛山に移ったが、部屋にテレビがあったので被災の情報を知ることができた。愛山に1週間居た後、町民会館に移り3月末まで居た。食事が足りないかなとも思ったが、よくしてもらったと思う。町民会館では女性が班を作って食事を用意してくれた。

4月から龍泉洞温泉ホテルに入った。広間は一人3畳ほどに仕切られていた。仕切りの高さは90センチで座ってしまえば隣は見えない。入口には段ボールのふたがついている。大広間に1週間くらい居たが、避難者が減り客間が空いたので妻の姉を含めて4人で移り、仮設住宅に入る5月半ばまでそこで過ごした。避難

所の中では龍泉洞温泉ホテルが一番広かった。申し訳ないくらいの待遇してもらった。洗濯は交替で洗濯機を使ってやった。

ホテルに居る間は、ホテルから被災地まで町のバスが出たので、日中は自宅に戻ってがれきの撤去などをした。被災してから避難所を4カ所、仮設、修理した自宅へと、計6回の引っ越しをした。

……三浦康征さん、ツイさん夫妻（中野）

◆町のマイクログラスで避難所へ

……町民会館へホテル龍泉洞愛山へ龍泉洞温泉ホテル

消防団の人たちに避難するようにと声をかけてもらい、小学校の階段を上って国道のトンネル近くの避難場所に行った。日が暮れてから町のマイクログラスがきて、町民会館に移った。炊き出しをしてもらい、毛



全国からの救援物資（龍ちゃんドーム）



龍泉洞温泉ホテルの間仕切り

町役場

◆「不自由のないように」「平等に」を心がけた

保健福祉課社会福祉室長 三上訓一



◆ろうそくで健康確認をした

3月11日は、夜11時頃に安否確認や避難者の健康状態を確認するため保健師と一緒に避難所をまわった。停電していたのでろうそくで健康確認をした。雪で寒かったが、農家が多いので家用発電機で暖房なども付けてくれていた。避難所ではホワイトボードに避難者の名前を書き出していた。

◆物流がストップ、町内で調達できる物資を集めた

3月12日の朝から避難者の食事のために米やみそ、野菜を買い出しに行ったが、町内もパニックでスーパーでは買い占められていた。町民会館を炊き出しのベースとし、町職員やボランティアでおにぎりを作り各避難所にピストン輸送した。自衛隊も来て、温かいご飯を発泡スチロールの箱詰めで届けてくれた。

衣料品は、3月12日に町内で男性用、女性用、S・M・Lサイズを含めて500着ずつ調達し、避難所で自分たちで選んでもらった。歯ブラシなど最低限の日用品も用意した。浸水区域外の避難者も含め、不自由のないように対応した。

3月11日、12日は沿岸の道路が通れず、内陸への道も交通止めなどで物流がストップしていたため、町内で調達できる物資を集めた。他市町村から避難してきた人もおり、多いときで80人から100人の避難者がいた。申し出がないと把握できないので実態は分からないが、救助法に従って避難者を支援した。

◆支援物資で「龍ちゃんドーム」がいっぱいになった

3月15日前後から国、県、民間から食べ物を中心に日用品、衣類が届き、保管場所の「龍ちゃんドーム」がいっぱいになった。避難所は、3日目にはホテル愛山、町民会館、龍泉洞温泉ホテルにほぼ集中できた。自分は3月13日から毎日、3つの避難所に食糧を基本にパン、おかし、カップめんなどを渡す業務に従事した。スーパーに商品がないので、自宅に戻った人たちにも不定期ながら食糧を送った。

衣類は、7月には夏物を渡し、9月には秋冬物の配布会を2日間行った。

◆支援物資をバザーで売り義援金にした

支援物資の扱いは町の裁量でよいということだったので、9月と10月に1日ずつバザーをし、売上を義援金として被災者に渡すことにした。1袋3000円で自分で詰めるような形で売った。反響がよく、車の渋滞ができたほどだ。残っていた物資の9割を買っていただき、義援金に回すことができた。

布も一人2枚配られた。4、5日居たが、向かいのおばあさんの体調が悪くなり、妻が付き添ってホテル龍泉洞愛山に行くことになり、一緒に移った。2、3日してから龍泉洞温泉ホテルに入った。

1週間ほどして被災地区に入る許可が下りたので、自宅に行ってみた。外壁は150センチくらいまで津波の跡があったが、2階が無事だったので、自分(傳明さん)が先に2階に住み始め、妻も後から自宅に戻った。……金澤傳明さん、サツ子さん夫妻(小本)

◆離れ離れの避難所生活

……妻はどんぐり苑、夫は町民会館、龍泉洞温泉ホテル

自分(豊さん)は7歳のときに昭和津波にあった。夜中の3時頃で大きな地震だった。3月で雪が降っていて寒かった。砂浜のほうにあった

100軒以上の家が流された。

今度も3月だ。大きな地震だったので津波が来ると分かり、逃げた。もし津波が来なかったら幸いで、とにかく逃げた。茂師の展望台から津波が来るのを見た。大きい波が来るのかと思っていたら、水の山が押し寄せて来るような感じだった。水の屏風のようなようだった。

自分と妻と親せきのおばあさんとその息子の4人で車で逃げた。妻は震災前に足をけがしていたので老人の避難所となっていたどんぐり苑に避難した。5月に仮設住宅に入るまで離れ離れだった。どんぐり苑の待遇はよかったようだ。自分は町民会館に避難した。人がいっぱいいて人をまたいで動くようだった。その後龍泉洞温泉ホテルに移った。

……箱石豊さん、和子さん夫妻(小本)



「道の駅いわいずみ」に駐留する自衛隊



町民有志の炊き出しの様子

自らの被災を越えて

◆町民会館で炊き出しをした

……職場〱龍泉洞温泉ホテル〱町民会館

震災の夜は、社会福祉協議会の一員という立場があるので役場の人たちと町民会館に行っておにぎりを作り、職場に泊った。津波が来たという実感はなく、職場での対応だけで手一杯だった。次の日も利用者の家を訪問して、その後は職場に泊った。「小本では家が流されたそうだ」と聞いていたものの自分の家は残っていると聞いていたが、2階だけが残され流されてしまった。

親戚の家から龍泉洞温泉ホテルに行き、その後町民会館に移った。

……佐々木悦子さん(小本)

◆消防団員で合宿……中島集会所施設

第7消防団員は、震災の3月11日

から4月中旬まで、家族と別れて中島地区集会所施設で合宿生活をした。20人以上が参加し、がれきの撤去作業や不審者が入ってこないように巡回などした。合宿中は、地区の女性たちが毎日食事を作ってくれた。

消防団員はみんな、小本で生まれ育っており、「地域のため」という思いが強い。震災後にやめた団員は一人もいないし、新たに入った人もいる。……岩泉消防団第7分団副分団長

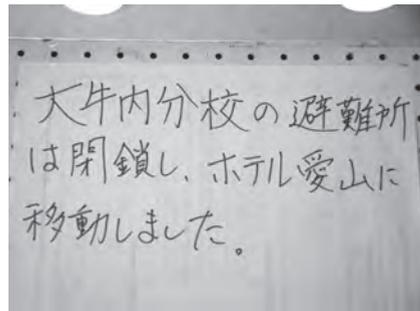
早野善彦さん(小本)

自分は消防団員なので中島の集会所施設に入り、家族は町民会館に行った。母親は、高齢者はホテル龍泉洞愛山か龍泉洞温泉ホテルにということで愛山に避難したが、何日かたって「家族と一緒がよい」というので家族で龍泉洞温泉ホテルに移った。

……岩泉消防団第7分団員 山口守さん(小本)



がれきの撤去作業をする消防団員



大牛内分校の避難所が閉鎖したお知らせ

3月11日、10カ所の避難所が設置され、439人が避難した。延べ避難所数は12カ所。すべてが閉鎖される5月31日までに避難した被災者は、延べ17,074人にのぼる。

岩泉町指定避難所 被災者避難状況

(単位：人)

	3/11 現在	3/12 現在	3/13 現在	3/20 現在	4/1 現在	4/10 現在	4/20 現在	5/1 現在	5/10 現在	5/20 現在	閉鎖までの 累計
岩泉町民会館	112	130	99	84	77	36	20	18	17	-	3,056
龍泉洞温泉 ホテル	60	103	116	97	120	140	150	143	144	29	8,928
ふれあいらんど 岩泉コテージ	-	-	3	20	35	35	35	35	35	24	2,174
どんぐり苑	15	40	20	4	12	12	12	12	12	9	768
ふれんどりー 岩泉	9	20	15	31	2	-	-	-	-	-	436
中島地区 集会施設	41	11	11	11	8	7	-	-	-	-	336
小成コミュニティ センター	50	10	11	-	-	-	-	-	-	-	86
茂師公民館	38	40	-	-	-	-	-	-	-	-	78
箱石イク宅付近	18	18	18	-	-	-	-	-	-	-	54
小本小学校 大牛内分校	79	98	-	-	-	-	-	-	-	-	177
済生会岩泉病院	17	17	17	-	-	-	-	-	-	-	51
ホテル龍泉洞 愛山	-	-	132	96	-	-	-	-	-	-	930
避難所生活者 合計	439	487	442	343	254	230	217	208	208	62	17,074

※ 3月29日以降は実人数を記載している

※ 中島集会施設は、家族等が他の避難所で生活している場合はそちらでカウントしている

※ 中島集会施設は、避難所と7分団消防団詰所を兼ねている

※ 3月11日から3月21日までは総務課集約人数をベースに各施設確認の上カウントしている

※ 累計は、各避難所が開設してから閉鎖するまでに滞在した被災者の累計人数である

※ 避難所数は12カ所。5月31日にすべての避難所を閉鎖した

岩泉町役場資料

第4章

仮設に暮らす

避難所を経ての仮設住宅暮らしもすでに2年近くが経とうとしている。

「仮設住宅」は、「仮設」といえどもそこに暮らす人々にとっては、かけがえのない生活の場所。「仮設住宅」についての課題がたくさんあることを私たちに教えてくれる。

その日常、楽しみ、将来に思うことなど話し合った。



仮設住宅の日々

- 岩泉仮設団地から 野崎耕一郎さん、橋本和昭さん
- 小本仮設団地から 加藤雄治さん、金澤千鶴子さん
佐々木悦子さん、田村八代江さん
- 小成仮設団地から 早野和さん、三田地サカエさん
三浦健二さん

撮影：熊谷貴里子



局、どうしても
で閉まらず、結
うとしたら停電
の水門を閉めよ
町

(1) そのとき！

野崎——水門を閉めようと
あの日は漁協（小本浜漁業協
同組合）で仕事をしていた。軽
トラックで茂師まで行く用事が
あり、その時に地震があったら
しいが、車を運転していて全然
分からなかった。茂師に着いた
らひどい地震だと聞いてすぐに
引き返した。中学校の裏に土煙
があがっていた。消防団なので
水門を閉めに走った。

閉まらなかったのが直接現場に行
き、手動で閉めようとした。4人
で行っていたが地震が大きかった
ので津波が来るといい見張りを立
てていた。「何かおかしい」とい
うことで「逃げよう」と判断、津
波が来る直前に向かいの山に逃げ
て間一髪で助かった。県の水門は
停電になると自動発電になるが、
町の水門にはそれがない。町の水
門に到着してから津波が来るま
で、30分か40分はあった。山に逃
げるとき海を見た。漁協の倉庫が
簡単にはみこまれた。怖いとは思
わなかったが、死ぬかと思った。
必死に走って山に逃げた。

橋本——危機意識がなかったが…
午後3時頃から仕事に出るの



で、家で食事を
終えて、横に
なってテレビを
見ていた。揺れ

たが横揺れだったのでたいしたこと
はないと思った。中学2年のと
きに庄内の酒田で震度6の地震に
あっているがそれは縦揺れで立っ
ていられなかったし、縦揺れでな
ければ大丈夫だと思っていた。仕
事場にはパートさんが来ていると
思ってしまったが、もうみんな逃げ
ていた。それでも危機意識がなく
「出荷にでも行こう」と気楽な気
持ちでいたら、消防団に「お願い
だから逃げてくれ」と言われた。
丘の上に行つてしばらくして1
波、2波をみてダメだと思つた。
小本トンネルそばに避難して上か
ら見ていたが、みんな「あー」で

おしまい。それ以上言葉が出な
かった。初めて見る光景で現実で
はないようだった。

加藤——地球が暴れているような
衝撃のなかで

2日前に大きな地震があり、そ
の時は同僚と3人で岩泉地区にい
た。大きな揺れでワゴン車が倒れ
そうになった。津波が来るとい
う感じはしなかった。

3月11日も岩泉地区にいた。地
球が暴れているような衝撃だつ
た。家族に貴重品を持ち出せるよ
うに準備するように言った。自分
はタイヤを付け換えていて4本付
けたところで、ホイルクヤップは
付けずに車で逃げ、車を中学校の
後ろに置いた。がけ崩れで煙がす
ごかった。そこから神社に逃げた
が、15人くらいいた。消防車が来



て「危ないから移動するように」
と言われ、トローワ（現在のの中野中
高年齢者就業改善施設。以下同）
のところに移動した。国道に出た
とき津波が来た。白山様（神社）
から500メートル、いずみさ
ん（泉久保商店）から信号のある
ところまで300メートルある
が、そこまで水が来ている。歩い
ていたら津波に追いつかれていた
かもしれない。体の不自由な人が
歩いていたら、消防団に拾つても
らつたようだ。自分は写真を撮る
うと車を降りていたら、消防団の
人から「津波が来るから逃げろ」
と言われた。

津波が来た
後、写真を撮る
うと山に上がつ
た。そこに逃げ



撮影：和野浩也

た人は陸中サービスセンターに移動した。写真を撮って戻ったら誰もいなかった。みんなはもう大牛内分校に車で移動していた。
三田地——「地震があったら」という約束どおりに



地震があったらそこに避難するように決めていた。避難したと

ころ、小本小の生徒がいたので、家の倉庫からブルーシートやござを出した。大きなテントもあったので生徒をテントの中に入れた。
三浦——物が見えないくらいの水しぶきだった

4日前に高校を卒業した姪と2人で家に居た。大きな地震がきてテレビが消えた。「津波が来る！」と姪は最初、裸足で飛び出したが、オーバーを着て靴を履いて何も持たずに2人で逃げた。小本支所の前で消防団の人に会った。「大津波警報ですから早く避難してください」と言われた。小本トンネルのところにあるので、地震があったらそこに避難するように決めていた。避難したと

3月7、8、9日と、磯の口あけがあり、採ってきた海藻を乾燥させるのに家の駐車場の前に干していた。箱に入れる作業も終わったので、昼寝をしようとしていた。妻は風邪で2階に寝ていたが、すごい揺れで降りてこられなかった。妻の手をとって1階に降りると、車で逃げた。その後いったん家に戻り、またすぐに逃げた。その時三田地さんの向かいも逃げるところだったが自分のほうが早かった。声をかけて逃げればよかったとそう思った。避難場所の



小本トンネルに着いて20分くらいして「煙があがった」と思っ

たが、波しぶきだった。物が見えないくらいにしぶきだった。防波堤づたいにきて、水門にぶつかって見えなくなる。海の防波堤を超えたのと水門のほうの波と一緒になつて小本に入った。すっかり見たわけではないが。「あー」とそれしか声が出なかった。

早野——広重の五十三次の絵のように見えた

3月11日は家に居た。小本に来て60年、おばあさんから、災害のときは位牌を持って逃げるようにと言われていたので、位牌をナツプサツクに入れ、通帳とお金も入れて逃げた。おながが空くから食

べ物を持って逃げるようにとも言われていたので、炊飯器のごはんをタツパーに入れておかずと缶詰を持って車で逃げた。その時は、一時避難が終わつたら家に戻ろうという気持ちだった。避難所は、昔は山の中腹だったが、いまは小本のトンネルの前の広場になっている。

息子はバス会社の仕事をしている。バスを避難させなければと、運転手さんにバスを運転させて自分はバスの後ろから車でついていって、駅前に1台避難させ、また戻り、もう1台のバスも避難させた。私たちは息子が来な



くて心配していたが、やっと合流して、そこから家々が流れる

のを見ていた。表現すれば広重の五十三次の絵とそっくりだった。水門をきれいに越えた。色もきれいだった。もう自宅の辺りはなかった。息子は「蔵も家もなくなつた」と騒いだ。

それから実家に行き、ちょうど借家が空いていたので何日か世話になり、避難所には行かなかった。大きいバスを2台も流したら、申し訳なくて、こんな顔をして世の中に入れられないと息子をほめてやった。そのバスでみんなを避難所に運んだ。

佐々木——利用者さんを誘導して

社会福祉協議会の障がい者施設で働いている。地震のときは仕事の中で、利用者さんの避難を誘導した。2階にも利用者さんがいたが、ふすまが倒れたりした。重度の障



がいを持つ利用者さんを逃がすのが大変だった。ほとんど岩

泉方面の利用者さんなので家に帰したが、小本の利用者さんの何人かは帰れなかった。その夜は、社会福祉協議会の一員という立場があるので役場の人たちと町民会館に行っておにぎりを作った。津波よりも職場のことだけで手一杯だった。町民会館に小本の人たちが来てから、ようやく大変な状況になっていると実感した。それでも暗い中でおにぎりを作り、職場に泊ったし、その次の日も職場に泊った。自分のことを考える余裕がなかった。「小本ではたくさんの家が流された」とは聞いていたが自分の家はあると思っていた。



気味だった。後からその時の状況をテレビで見ると、よく無事

その夕方、主人が来て、そこで自宅が流されたことを知り、おばさん宅に2人で泊まった。家族は全員無事だとその時初めて知った。ベッドに寝たい人は乙茂にある介護老人保健施設の「ふれんどりー岩泉」で降りてくださいということとで、お母さんはそこに泊まった。自宅は小本の八幡のあたりにあったが、2階だけが残っていた。金澤——自分の家がなくなっているとか聞かされても信じられなかった。仕事が休みで、車で宮古の銀行に行っていた時に被災した。外の電柱や看板が揺れて停電になり信号も止まった。車が静かでない

だったと思う。岩泉で仕事をしてきた娘のことも心配していたが、国道45号を走っているときにたまたま携帯が通じた。実家は（宮古市田老の）グリーンピア田老の近くのので、そこに避難して警報が解除になるまで実家に居た。車のナビでテレビを見た時、宮古の魚市場の屋根まで波がきていたが、まだ自分の家はあると思っていた。

心配になって小本の自宅に帰って来たが小成トンネルはがれきで通れず、別の道を通った。小本の人たちは茂師、中島に避難したと聞き、みんなの避難しているところに行つた。茂師にある夫の実家に行つたら、夫の姉がいて、「小本は住宅が流された」と言われたが、自分で津波を見ていないので



園は全員避難した後で誰もいなかった。子どもたちはトローワの

信じられなかった。次の朝、田老にある実家から兄が来たので、「私の家あるよね?」と聞いたたら、「無え」と言われた。明るくなっ
てから見に行ったら家の基礎しか残っていなかった。夢を見ているのかと思ったが現実だった。

田村——3人の子どもを乗せて

夫は漁師だが、次の日に結婚式があるため、仕事を休んでいた。自分は、娘が4月から小学校に入るので宮古市に買い物に行つて帰つて来たところだった。地震が起き、保育園に子どもたちを迎えに行く途中で、おばあさんが誰かに背負われて帰つて来た。保育

避難所にいると聞いて迎えに行つたところ、園児は急いで避難したためにパジャマの上に着を着ている子もいた。3人の子どもを車に乗せた後、寒いので毛布を取りに家に戻った。食べるものを袋に入れていたが、子どもが「お母さん、怖い」と騒ぐので急いで逃げた。近所のおばあさんが道で腰を抜かしていたので、助けようと車から降りたところ、消防の人が来たので、みんなでそのおばあさんを車に乗せて小本トンネルまで逃

(2) 仮設暮らしが始まった

野崎——大牛内分校と岩泉地区の避難所にいたが、そうしているうちに岩泉に移った。

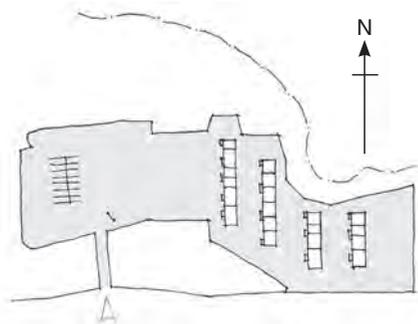
橋本——町の中心、役場に行けば

げた。そこで津波を見た。子どもが泣いた。消防団に避難するように言われて、がれきを避けながら大牛内分校の避難所に行った。夜も余震がひどく、学校なのでガラスがガチャガチャ揺れた。夜、子どもが泣くので周りに申し訳ないと思った。次の日、宮古市摂持から来た消防の人に、田老に住んでいたたった一人の同級生が津波で流されたと聞いて「あー田老も終わりなんだ」と思った。

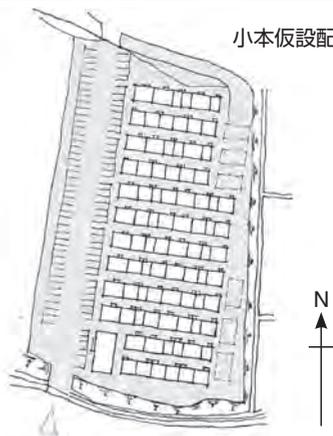
なんとかなると思ひ、町民会館に行つて、最後までそこに居た。

加藤——大牛内分校に3日、次にホテル龍泉洞愛山に1週間、それ

小成仮設配置図



小本仮設配置図



から龍泉洞温泉ホテルに行った。

三田地——妹が大牛内に住んでいるので妹のところにしばらく居た。避難所に行かないと、子どもたちの連絡がつかないのでホテル龍泉洞愛山に行った。

三浦——龍泉洞温泉ホテルに10日、妻の実家に4カ月居て、その後仮設住宅に入った。避難所は気疲れした。

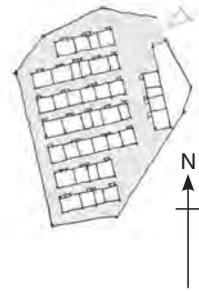
橋本——最初から最後まで町民会館に、約2カ月居た。支援物資が届き食材はいっぱいあったが、食事を作るのが大変だった。女性たちが作ったがストレスがかかっているのに他人の分まで作るのは大変だと思った。「愛山や温泉ホテルに入っている人たちは上げ膳据え膳なのに、自分たちは米ときかめメニューまで考えなければなら

ない」とか、だんだんに自分たちの環境が悪いと少しでもいい方をうらやましがる気持ちが出た。避難所ではちよつとしたことが大問題になる。毎日のことだから…。

加藤——でも「自分たちでやる」という自由があったのではないか。ホテルではご飯のときに自分の箸をもって入口に並ぶ。これが一番嫌だった。1回に50人が60人なので、それが終わるまで待つていることになる。ホテルにはテレビもあり大勢と話もできるが、自分は箸をもって並ぶのが本当に嫌だった。避難所が仮設よりもいいところは、大勢と一緒に話ができる。仮設住宅に入ると、個々ばらばらになって話ができない。

橋本——仮設住宅への入居は、「希望をとる」というよりも、「でき

岩泉仮設配置図



ればこうしてくれる？」という感じだった。この家族は岩泉団地でもいい、この家族は小成団地でもいいかという感じで、町の担当者が交渉に来た。調整できたから結果はよかった。

金澤——うちは希望して小本団地にした。

早野——岩泉仮設を選んだ人には、病院が近いから、という理由で希望した人もあったということを知っていた。

三浦——仮設の規模によって、集会所があったり、談話室だったり

と、少々違いはあるが、集まる場所がないならないうちにやっていた。あまり無理はしていない。

佐々木——おばさん宅に1泊したのが長くなると思い、主人と相談して龍泉洞温泉ホテルに行き、1週間ほど居た。途中で避難者の入れ替えがあり、高齢者は温泉ホテルということになったので、私たちは町民会館に移った。町民会館ではみんなで朝5時に起きて自炊した。昼は小本に片づけに行く人、仕事に行く人とそれぞれ出掛けた。みんなで協力して楽しく避難所生活ができた。

岩泉町の被災は小本地区だけなので支援助資はたくさんあった。余ったものを（宮古市田老の避難所になっている）グリーンピア田老に提供しようと提案したが、そ

うすると今後町に支援助資がこなくなるのではということ、できなかった。臨機応変にやってもいいのではと感じた。

金澤——夫は船乗りで、岸壁が壊れて帰って来られず、沖に2日間いた。3日目に戻って来たが、道路が通れないので、田老から歩いて帰って来た。その後はおばあさんのうちにお世話になっていたが、個人の家には情報が入ってこない、避難所に行くことになった。愛山に1週間、次に町民会館、次に温泉ホテルに行つて、その後仮設に入った。

田村——大牛内分校に避難して3日目に、何人かが龍泉洞温泉ホテルに行けると聞いた。「子どもたちも小さいのだからホテルに行つた方がいい」と周囲に言われ、温

泉ホテルに行った。温泉ホテルには1週間居て、滞在中に「ふれあいらんど岩泉のコテージを家族だけで使えるが、どうするか」と言われた。「コテージに移動したら、食べ物はどうしたらいいか」と聞いたら支援物資の菓子パンとカップラーメンしか渡せないがそれで

(3) 仮設住宅をチエツクする

野崎——当たり前のことだが、仮設住宅は狭いので、部屋が3つあってもひとつが物置になってしまう。仮設は寒いという人もいるが自分は寒くない。狭いのですぐに暖かくなる。
橋本——自分の家が狭いのと仮設が狭いのでは違う。自分の家と思えば狭くても我慢ができるが、

よければ行くようにと言われ、お金もないが行くことにした。米、みそ、しょうゆがなく、田老の実家に行き、みそやしょうゆを分けもらった。1週間くらいしてからお米の配給があった。5月に仮設住宅に入るまでコテージに居た。

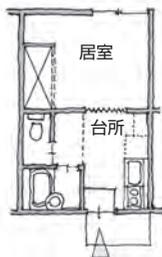
仮の住まいが狭いのはつらい。それに、あれがだめ、これがだめというのがある。例えば、同じ仮設住宅内で移動してよいかというところそれは制度上だめだという。県会議員が来たときに直談判して移動ができるようになった。いくら単身でもワンルームはありえないのではないか。向かいのおばあ

さんの家がワンルームだが、あれではイライラすると思う。2部屋のところ为空いているから移るよいうに言っても、「もう少しだから我慢する」といつて動かない。「引越したら」と言っても、「岩泉地区に復興住宅が完成するまで、あと半年だから」と言う。半年の我慢かどうかは、できてみないと分からないよね。

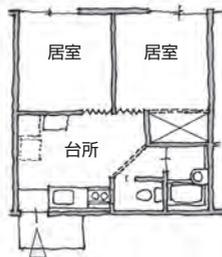
金澤——収納スペースがないので物を置く場所がない。お風呂の追い炊きも無くて大変だったが、この間やつと追い炊きが付いた。でも風呂場が狭い。家族でお風呂に入る時間が違うので続けて入れない。冬はすぐに湯ぶねのお湯がさめるのでシャワーだけだった。
田村——仮設住宅は夏の暑さが大

仮設住宅のプラン

6坪タイプ



9坪タイプ



12坪タイプ



変。

佐々木——風が通らないし……。

玄関の庇もどうにかならないか。

加藤——うちは3人で2部屋だが、2部屋といっても4畳半が2部屋で、押入れもない。とくに風呂が狭い。浴槽の中に入ると、動けなくなってしまう。浴槽は無しでシャワーだけでもいいと思う。

田村——子どもがのびのびと過ごしてほしい。プールに行くにも何

(4) 仮設住宅を快適に！

……大きな共同風呂、空き部屋の開放、調理室、あずまや、植物

橋本——龍泉洞温泉ホテルというのは第三セクターで町のものなのだから、こういうときは町民のために使ってほしい。全員が仮設に移ったら10日に1回でも、半月に

をするにも岩泉地区に行かなければならないので不便。小学生の

子どもは大牛内の仮設校舎に通学しているが、バレーの練習も大牛内から岩泉地区に行かなければならなくて不便。まだまだ仮設生活が続くので子どもが遊ぶ場所がほしい。

早野——津波の後のがれきを見てこれほど自動車があったのかと思つた。車の多さに驚いた。

1回でもお風呂を開放してほしいと言っていたのだが……。

三浦——入浴券でも配布されればいいね。

三田地——改善してほしいのはや

はりお風呂。隣に音が聞こえるので静かに入っている。今は、お風呂は1カ月に1回、温泉ホテルに入浴に行っている。

三浦——お風呂に窓が無いので息苦しい。追い炊きは付いたが、使う人と使わない人がいる。

橋本——この辺りに住んでいる人はユニットバスに慣れていない。ユニットバスの息苦しさは独特だ。

三田地——集会所にも、調理室があれば、時々みんなで料理が作れる。今は調理室が無いので皿も無い。仮設で使う皿をあげたいと言われても調理施設が無いので皿をもらっても仕方がない。

加藤——調理室は管理が大変だけどね。永遠の住まいではないので火を使うとなると大変だ。むしろ

空き部屋を開放すればいい。そこでタバコを吸う、お茶を飲む、缶ビールを飲む、そういう部屋があればいい。

早野——小本仮設団地は、三田地さん（自治会長）のおかげで和やかにスムーズに使わせてもらっている。ここの仮設の組織は素晴らしいと思う。

加藤——あずま屋をブルーシートで創るかということになったが、きれいにできるならいいが難しいと思う。集会所などは鍵を開けて入るには勇気がいる。もっと外に出て気軽に話せるようになってほしい。草取りでもなんでも外に出てほしい。中でみな固まってしまふ。できるだけオープンにしてほしい。

三浦——行きやすいところ、行き

にくいところがあるみたいだね。

野崎——岩泉団地の談話室は、最初、鍵をかけて使うときは鍵を貸すようにしていたが、今は、鍵を入口のところに置いて自由に使えるようにしている。「自由に使っている」としているがあまり使われていないのではないか。

橋本——ひどく暑い日は談話室に何人が集まってエアコンをつけて涼みながら話をしている。役員は集まったときにみんなで吞んでいく。仮設が小規模なのは小規模なりにいいところもある。

三浦——小成仮設の集会所は、元学校なので、集落で管理して使っていい。

加藤——空き部屋を利用したら？

三浦——みんな家に閉じこもっていて、誰からもそんな話がでない。



仮設に設置された物置

入口も創意工夫次第

働いている人は外に行くが、年配の人は家にいるのにみんな呑んだりするでもない。山田町のほうから来て団地に住んでいる人もいるが、たいいは地元に住んでいた人で、知っている人ばかりなんだが、年齢の差もあり、なかなかまとまらない。

佐々木——隣の幅（隣棟間隔）が狭い。

金澤——音も筒抜けで、隣に申し訳ない。

佐々木——母は階段が大変だと言っている。手すりがあっても段差が高くて大変だ。スロープがないし。

金澤——隣のおじいさんもスロープがなくて大変そうだ。

野崎——岩泉仮設にバルコニーのようなものがある家があるが、自

分で作ったのだと思う。スロープの工事はやってもらい、それに足したのだろう。大工仕事が得意な人がいる。

加藤——岩泉仮設のその家を訪ねた時、椅子を出してくれて、お茶を飲んできた。5分のつもりだったが、30分以上居ってしまった。居心地がよいのが分かったので、家を建てたらそうしたい。

早野——息子が日曜大工が好きであちこちに棚を作ってくれて助かった。棚を作って部屋が広くなった。押入れは一つだけなので、どの部屋にも棚を作った。

三田地——入口に、物入れの箱を作った。

加藤——入口に棚をつけ、外に生ごみを置くところがないのでゴミ置き場を作った。消火器がある

のでふさぐわけにはいかないが、その上と下を物置にした。玄関に屋根を付けた。何軒かは付けているね。妻に「仮設住宅なのだからあまり手を加えてはいけない」と言われているが、雨が降ると屋根がないから網戸を通して水が入ってくる。

三浦——工夫するにはほかの仮設住宅を見ることだね。グリーンピア田老の仮設団地でも住みやすいように、いろいろやっているようだ。

野崎——岩泉も植物好きな人が3人くらいいる。何人か同じ趣味の人がいるといい。

金澤——去年はいただいたゴーヤのネットにきゅうりを作った。

加藤——買い物や病院などは前と変わらない。体が不自由な人に

はバスができた。仮設団地の集会所に診療所が置かれるようになった。歯科は週に1回程度町の歯科診療車が、この集会所前に来てくれる。以前より少し便利になった。佐々木——体の具合について話を聞いてもらえるだけで安心だ。

佐々木——車もあり、仕事で岩泉に行くので買い物は不自由していない。岩泉に行けない人は不自由かもしれないが生協の配達もある。

早野——人の知恵はすばらしいと思う。行政に文句を言えばきりがない。それぞれ工夫してやるしかない。

(5) お付き合いのかたちは変わったか？

……支援にも励まされて

三田地——岩泉仮設は、もともと同じ小本地区に住んでいた人が住んでいるのでお付き合いはこれまでと変わらないと思う。

金澤——みな顔見知りなので仲良くやっている。昔よりお裾分けをもらう。

佐々木——前よりも関係が近くなった。洗濯干しの時の会話やベッチでのおしゃべりも楽しい。

加藤——小本地区の中でも、中野の集落から来た人が4人いる。みんな知り合いだが、日ごろ、日常的に付き合っているというわけで

はなかった。むしろ、ここに来てからお付き合いができてきている。その一方で、被災しなかった人と疎遠になった。自分がそう思うのか、相手がそう思うのか分からないうけれど。ここに在る限り、会わなくなつた。

野崎——そういうことは多少はあるかもしれないと思う。

三浦——それは大いにあると思う。こちらよりも向こうで敬遠する。何と言つていいのかわからない、というのがあつたらう。

橋本——町内でも温度差がある。同じ町内でも20キロくらい離れば実感が無い。3月11日の夜、岩泉地区では、「そんなことあつたの？」という感じだつた気がした。

野崎——3月11日の夜、岩泉地区ではジョギングしている人がいた。ジョギングする人が悪いわけではないけれど、20キロ離れただけでこれだけ違うのか、と思つた。加藤——たくさんの人に支援してもらつた。どれもありがたいが、音楽のイベントがよかつた。東京ベンチャーズが来た。芸能祭や郷土芸能よりも人が集まつた。もう一つグループが来た。その時は手拍子があり脇から写真を撮つたが、写真はなくても目に焼き付けておけばいいと思つた。それくらい楽しく盛り上がった。

映画もよかつたが、映画は、昼間やつても仕事をしている人は見られないし、見るだけになる。外で音楽がいい。気持ちがいい。三田地——車で来たカラオケもよ



2012年3月11日から小本駅通路で開催された「だれでもフォトグラフィ写真展」



カラオケ大会

撮影：(上)加藤勝彦 (右)田中道雄

かった。

佐々木・金澤——昼間働いているので、イベントはあまり参加できない。

加藤——「だれでもフォトグラフィア」もよかった。今まで興味の

(6) 新しいまちへ……復興に期待して

三浦——復興は少しずつ進んでいると思うが、やはりスピードを早くしてほしい。地権者も行政も、復興に向けて頑張って、ここ1、2年のうちにみんなが落ち着けばいい。

早野——はじめて地域の人たちに助けられて暮らしているのだなと実感した。同じ地域の人たちと、また和やかな地域になればいいと思う。それを一番願う。とりたて

なかつた人も、女性も参加している。1回限りでないのが良い。仮設から散らばってもずっと継続して、復興していく岩泉を心に刻む人がいるといい。

て大きな事件もない村だったがそこがよかった。

津波の後、家のがれきの中から、夏茶碗が桐の箱に入ったまま出てきて、復興の象徴だと思った。他のものは全部流れたのに、これだけが……。箱が桐で出来ていたので、桐はいいと思った。人や我が家のことを改めて知る機会になった。

三田地——早野さんと同じように



がれきの中から見つかった桐の箱に入っていた夏茶碗とお雛様。右上の写真は、「どこでもカフェ」というイベントで披露された夏茶碗

昔からの近所の人たちとまた一緒に暮らしたい。早野さんのお宅で木目込み人形のお雛様が出た。うちの流されたお雛様もがれきの上ののっていた。3月3日にはここ（仮設住宅の集会所）でお雛様をやった。

早野——三田地さんの流されたお

雛様も助かった。生活上必要なものは、布団も何も出てこなかったのに。人形にも魂があると思った。三田地——出てきたお雛様は、姪の母の実家からもらったお雛様だ。

橋本——うちもお雛様だけ出てきた。お雛様は桐の箱に入っているので浮く。金屏風からなにから全部出てきた。

仮設を出た後は復興住宅に入居するにせよ、新たな宅地に自分で建てるにせよ、流された土地にもう一度自宅を建てるにせよ、まだ行き先が分からない。復興住宅の家賃設定の考え方が既存の公営住宅と横一線になつていふように思う。災害にあつて大変だから入るのにそれでは復興住宅といえないのではないか。

既存の町営住宅より家賃は低く設定しても良いと思うのに……。

加藤——一日も早く仮設を出たい。

仮設は仮設で、雨風をしのぐだけだ。我慢も2年が限度、それが限界だと思う。早く終の棲家に落ち着きたい。早く仮設を出ることをみんな望んでいると思う。

野崎——津波の前は当たり前前の生活を当たり前前につけていた。当たり前前が幸せなことだと思ふ。皆さんが一日も早くちゃんと暮らせるようになると思ふ。当たり前前の生活が実現するようになってほしい。

佐々木——小本という集落が一つだったので、皆で一緒に小本をつくりたい。あちらこちらバラバラにならずになるべく一カ所にいたい。

金澤——仲良くしてきた人と一緒に暮らしたい。難しいかもしれないが。

夫はトロール船で底引き網をしている。イカやタラをとつていて、辛い仕事がある。家が早く決まるといい。

田村——早く漁業ができるといい。夫にやりたいことをやらせてあげたい。でも夫は船を買いたいだろうが、私は先に家がほしい。

佐々木——安定した家に戻りたい。3人で2部屋は狭い。自分の家で早くゆつくりと寝たい。

早野——自分の家を建てたい。家があつて商売ができる、それくらいの家を建ててくれるといい。仮設から葬式は出したくない。あと2、3年は大丈夫そうだけれど。

了

の状態。町は被災者のケアで手一杯であり、町の業者もがれきの撤去などで手いっぱいなので、仮設建設は県が担うことでよかったと思っている。仮設住宅の建設はどうしても急がれるので、仮設住宅を恒久住宅にしていくのは難しい。

◆復興に向けて

今は、一日も早く復興をやろうと思っている。初めて経験する大災害なので、定年になるまでに復興できるよう、がんばらなくては。

工務店

◆眼鏡が壊れたことも気づかずに

株式会社 西倉工務店 代表取締役 西倉正三さん



地震の前の日は、私の誕生日で友人たちに盛大に祝ってもらった。帰り道で海を見たらベタなぎで、打ち合わせに行った茂師の接骨医と、「こういう後には何が来るかわからない」という会話をした。一昨年もそうだった。

地震のときは、会社で見積りを作っていた。社員はすぐ港に走った。建設業協会に入っているので、緊急時には応援することになっている。まず津波被災の調査をしなくては、ということだったが、交通規制でなかなか行けない。12日から娘と2人ががれきの中を回った。訪ねて行くと、みんな、恐ろしさで悔しさで泣くので、なかなか調査にならなかった。

復旧工事は、人手もない、資材もない、ガソリンもない、という中で、人脈をフルに使って人を集め、会社にある資材、ほごず(解体する)家から貰った資材などを利用した。

県から「仮設建設の技術者を集めてくれ」と頼まれ、建築士会を通じて、青森、大船渡などからも人を集めた。ネットで調べて宅急便で資材を取り寄せたりもした。杭打ちは、トンネル工場のズリ(碎石)を置いたところでは杭が刺さらない。土間コンクリートを打ってその上にH型钢を置いて土台にして建設した。

従業員は総出で復旧工事、妻は炊き出し…、調査や工事の合間には仮設住宅にベンチやプリンターを贈り、花植えするなどのボランティア活動もある。木工体験ボランティアも広まりつつあり、がれきの中から拾った柳の木を製材して、まな板にするなどもして喜ばれている。眼鏡のレンズの片方がなくなっていたことにも気付かなかつたくらい忙しかった。でもみんなの喜ぶ顔を見れば寝なくてもよいくらいだ。ますます忙しくなりそうだ。

子どもは宝物、仮設校舎は建てたが、ちゃんとした保育園や学校を早く整備して勉強に励んでもらいたい。お年寄りも、自力で家を建てられない人も多いので、復興公営住宅を立派にしたい。

町役場

◆まずは住む場所の確保を、と…

岩泉町役場地域整備課長 浦場二三男



◆地震翌日、プレハブ住宅業者はすでに国が…

地震の翌日から、仮設住宅の建設のために町内の業者を動かした。しかし、すでにプレハブメーカーは国におさえられていて、町で独自に建設することは不可能と思えた。そこで県に建設を要請していくことになった。

まず、市町村から県に仮設住宅を建設できる候補地を提出するようになっているので、岩泉、小本、小成の町有地の中で探し、場所が決まった。岩泉仮設は、少年野球の練習用グラウンドとして利用していた町有地に建設。小本仮設は、もとは町有地で岩手アライの駐車場に貸していた場所を返してもらって建設した。小成仮設は、小成付近で被災した人は小成に住みたいという希望もあり、町有地では狭かったため近隣の3人から民有地を借りることになった。

仮設住宅の建設は県によるもので、土地の用意ができ、手をあげたところから順番に決まっていた。建設戸数については、町で敷地のおおよその面積を出して県に提出した。県が候補地を見に来た時にはハウスメーカーも同行して、すぐに決まった。

建設戸数は、被災者の数から必要戸数を出し、150戸を目指した。実際には143戸を整備した。



◆入居!…抽選?

岩泉町の仮設建築の着手は、他の市町村と比べても早かったと思う。着工は、岩泉4月6日、小本3月30日、小成4月22日。入居は、岩泉5月12日、小本5月13日、小成5月27日。

公的住宅なので、本来入居は抽選だが、それを避けて、どの団地を選ぶかを話し合った。地区ごとにまとめて入居するというほどではないが、戸数が確保出来たのでおむね希望のところに入れた。

住戸選択の割り振りは町で行った。1人用は6坪、3人までが9坪、それ以上は12坪。子どもが5人いる家庭では2戸分に入っている。今でも「狭い」という意見が出る。荷物が増えるので狭いのは当然だが、現在もほぼ最初のままの入居が続いている。

◆建設は地域整備課、入居後は保健福祉課が担当

入居までは地域整備課が担当するが、入居後は保健福祉課が担当している。お盆などで子どもたちが帰省したからといって、広い仮設に移ることなどは認めていない。町内に住所のある人だけを入れることになっている。建設にあたっては町は「素通り」

◆仮設のまちには店舗も必要

岩泉町役場経済観光交流課 経済工商室長 佐々木忠明



◆東北で2番目に早かった仮設店舗のオープン…

仮設店舗の建設は、独立行政法人中小企業基盤整備機構が実施主体であるが、町には、建設場所の提供、入居者の選定などが委ねられている。

平成23年4月半ばに国の事業の説明会に参加、被災した事業者をピックアップして事業再開の動向を聞いた。経済産業省の東北経済産業局からも説明があるということで、5月に説明会を開催し事業者の方に参加してもらい、希望を聞いた。敷地は町が民有地を借り、6月の議会で補正予算を組み、土地の造成工事を行い、事業のエントリーをした。

申請が早かったので、小本の仮設商店街は9月にオープンした。東北では2番目に早い建設である。被災後の早い対応がよかった。地権者は快く土地提供に応じてくれ、造成工事もスムーズにできた。

◆7店舗が入居

お盆の商戦期間に間に合わせたいという要望があった。事業のエントリーをしてから現地調査までは早かったが、なかなか建設に着手されず、結局お盆を過ぎた9月完成となった。

最初の入居は地元のスーパー、あとは電気屋さん、洋服屋さん、ガス屋さん、海産物屋さん、薬屋さん、畳屋さん。現在はいくつかは入れ替わっている。



仮設店舗オープン 撮影：山口有稀音

◆倉庫の建設に取り組んで…

いま(24年7月)は機構と漁業者・農業者の倉庫の建設をしている。希望数が多くなって、漁業者については集約せよという規制ができた。当初は、水道やトイレも付くということだったが、それも付かなくなるなどで、取りまとめた漁協の立場が悪くなってしまった。8月に漁港のそばに倉庫ができる。海の仕事をしている人は海に戻りたがっている。

◆仮設店舗の今後は…

小本の店舗総数は37件。雑貨屋や海産物加工業者だ。被災店舗業者は全部で31件。25店は再開の意思があるが、1店舗は休眠。17店舗再開で、うち7件が仮設店舗(仮設商店街)に入った。

第5章

だれでも フォトグラフィア

岩泉町の被災からの復興の過程を、
住民自らが写真によって

記録していくプロジェクトが進んでいる。
この活動を通して

自分たちのまちをみつめ直し、
復興への力を養っていききたい。

新たに生まれたフォトグラフィアたちの写真は、
「岩泉のいま」を、いきいきと

世界に伝えるメッセージとなっている。



1. 「岩泉・小本のいま」をとりかえる

「だれでもフォトグラファ」は、仮設住宅居住者を中心とした岩泉町の住民が、町の被災からの復興の過程を、プロカメラマンの指導を受けながら、写真によって記録していこうとする現在進行中のプロジェクトである。住民が「それぞれのいま」を表現することによって、被災のあとの苦しい時期を強く受けとめ、少しでも豊かな気持ちで過ごし、復興に向けての力を養うことを目指している。

被災から復興にいたる過程を、住民自らの手で記録することを通して、自分自身の住む地域を見直し、地域のアイデンティティを再発見すること。それによって、安全で安心な、また、快適な美しい地域がつくられていくことも期待されている。

このプロジェクトは、UEFA JAPON（ユイファジャポン）国際女性建築家会議日本支部）が主宰し、役場小本支所も協力している。

2. 「6歳から73歳まで」参加して

平成23年11月から第1次（冬）参加者を募集。12月には写真家の橋本照嵩さんから写真撮影の技術やこころを学ぶ「やり方説明会」を開催するとともに、参加者にレンズ付きフィルムまたはカメラ用のフィルムを配布。24年1月に



写真展は小本駅構内で開催された



橋本照嵩さんによる撮影技術指導

は、6歳から73歳まで、20人を超える住民の作品が寄せられた。同年3月11日から、その写真展「岩泉・小本のいま……春遠からじ」を小本駅連絡通路で開催。展示作業にはフォトグラフィアたちも参加。三陸鉄道の支援も受けた。24年5月には第2次〈春・夏〉参加者募集を開始。9月には〈冬〉作品の合評会ならびに、2回目の「やり方説明会」を開催した。あわせて〈春・夏〉の作品が15人から寄せられた。

同時に、第3次〈秋〉参加者募集を開始。12月には13人の作品が集まった。〈春・夏〉作品の合評会を同時開催するとともに第4次〈2年目の冬〉の募集を開始している。

3. 「いま」を世界に発信しよう

写真を撮ることの魅力を新たに発見したフォトグラフィアたち。写し撮られた人々の営みや表情、また、自然の風景や動植物は、フォトグラフィア自身と岩泉の復興のプロセスを、いきいきと伝えている。(なお、第5章だけでなく、各章にプロジェクトによる写真が掲載されている。)

説明会や合評会、そして写真展は、住民の交流の場となるだけでなく、世界へ向けた発信の機会となっている。

25年3月11日には、〈春・夏〉と〈秋〉の作品をまとめて、2回目の写真展を開催する予定である。

橋本照嵩氏 (はしもとしょうこう) 写真家
 昭和14年、宮城県石巻市生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。昭和49年写真集『警女』(のら社)で日本写真協会新人賞受賞。平成17年、故郷石巻と北上川の情景をまとめた写真集『北上川』(春風社)を刊行。石巻の子どもたちと「めだか屋」(写真教室や野外写真展)を平成8年から平成21年まで続ける。

○このプロジェクトには、第1次募集から社会福祉法人中央共同募金会の助成を、第2次募集からは富士フィルム株式会社よりレンズ付きフィルムの寄付を受けている。



写真展「岩泉・小本のいま……春遠からじ」

4. 岩泉・小本のいま

被災を越えて



基礎 阿部範子



基礎 佐々木一幸





半年後の港 工藤良雄



57
我が家の姿 山口有稀音



全線走れサントツ 武田勝磨





がれき 1 三浦義昭



テトラポットの変化 1 田中道雄



がれき 2 三浦登紀子



テトラポットの変化 2 田中道雄



がれき 3 田中道雄



テトラポットの変化 3 田中道雄



59
がれき 4 三浦登紀子



テトラポットの変化 4 田中道雄



あの日のままのガードレール 三浦浩子



こんなに強い水の力 阿部範子



水門の風景 三浦登紀子



水門の風景 加藤雄治



水門の風景 三浦登紀子



水門の風景 長崎基一



6
堤防の内側 加藤雄治



強い海風 田中道雄







今年も鮭を干す 三浦義昭

仮設の暮らし



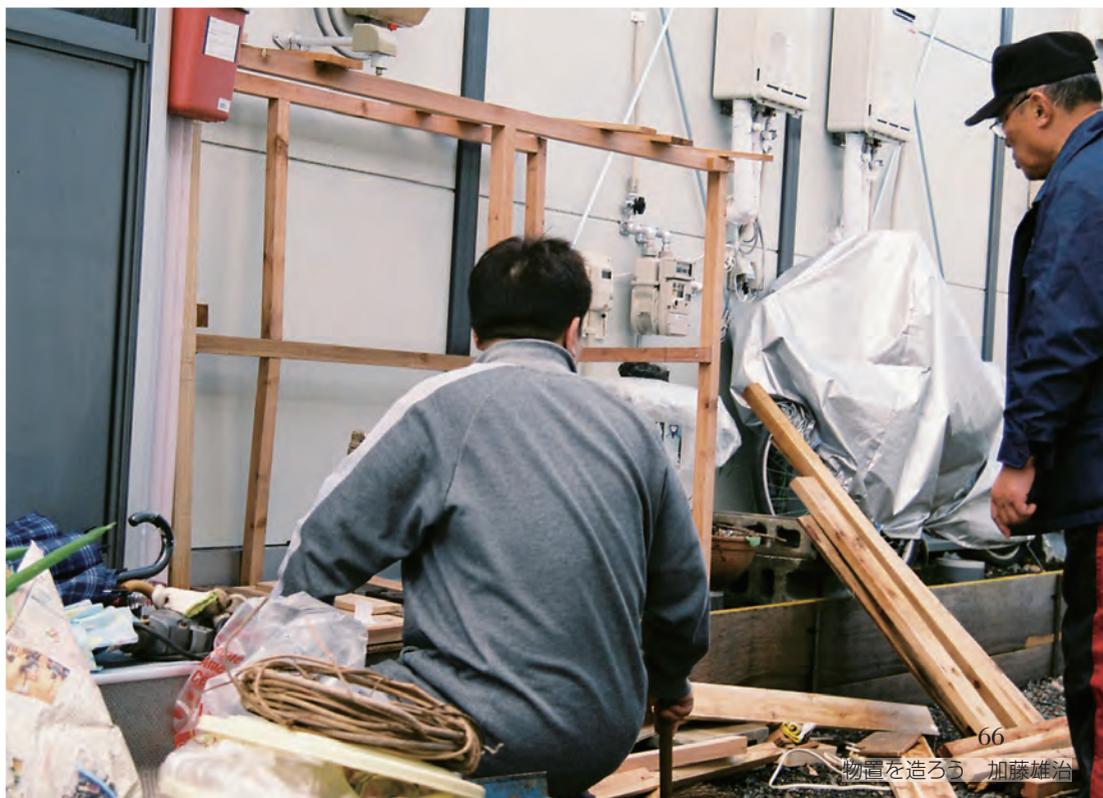


仮設も雪化粧 三浦義昭





行灯づくりを教わる 阿部恵子





仮設の仮飾り 加藤雄治



おばあちゃんのくるみむき 金澤玲奈



雪遊び、楽しいね 金澤卓也



やっぱりコタツはほっとする 佐々木一幸



おいしい? 田村八代江





一緒に遊ぼう 佐々木悦子



雪かきも大変 佐々木悦子



消防訓練 上下純一



未来のAKB? 田村八代江



野山は緑 佐藤憲二





今日は女性だけで…… 三浦なおみ



なかよし 金澤玲奈



松明かしと家紋をつけた手作りの夢灯りで先祖供養 佐々木悦子



夏が来た 加藤雄治



一緒に線香花火 箱石昌彦



きゅうりよ伸びる 箱石京子



ひと休み 箱石昌彦



干し柿 金澤卓也



オープンカフェ(?)ができた 箱石京子



落ちないでね！ 佐々木悦子





いつものベンチで 三浦悦子



かごづくり 三浦なおみ



私が写っているかなー 有原隼人



朝顔のスクリーン 金澤千鶴子



仮設もわが住まい 箱石昌彦



夢みこしがやってきた 田村八代江

特別な日



ひとこと、どうぞ 金澤清香



さあ餅つきだ 田中道雄





おもと青空市、保育園児の出番です 加藤雄治



七ツ舞の踊り手たち 加藤勝彦



復興祈願! おもと青空市 三浦浩子





夕空の虹 佐々木悦子

岩泉の風景





漁の準備 長崎基一



白鳥が来た！ 佐々木一幸



漁火 金澤清香



86
朝霧 小成智子



小本の春 箱石チカ子



小本川河口付近 三浦浩子



山の眺望を楽しんだ日 佐々木一幸



88
漁船が集結 箱石昌彦



昇る朝陽 小成智子



夕映えの小本駅 小成智子



日暮れどき 小成智子



山の夏景色 小成智子



船はまだ秋草の中に 三浦トシ子





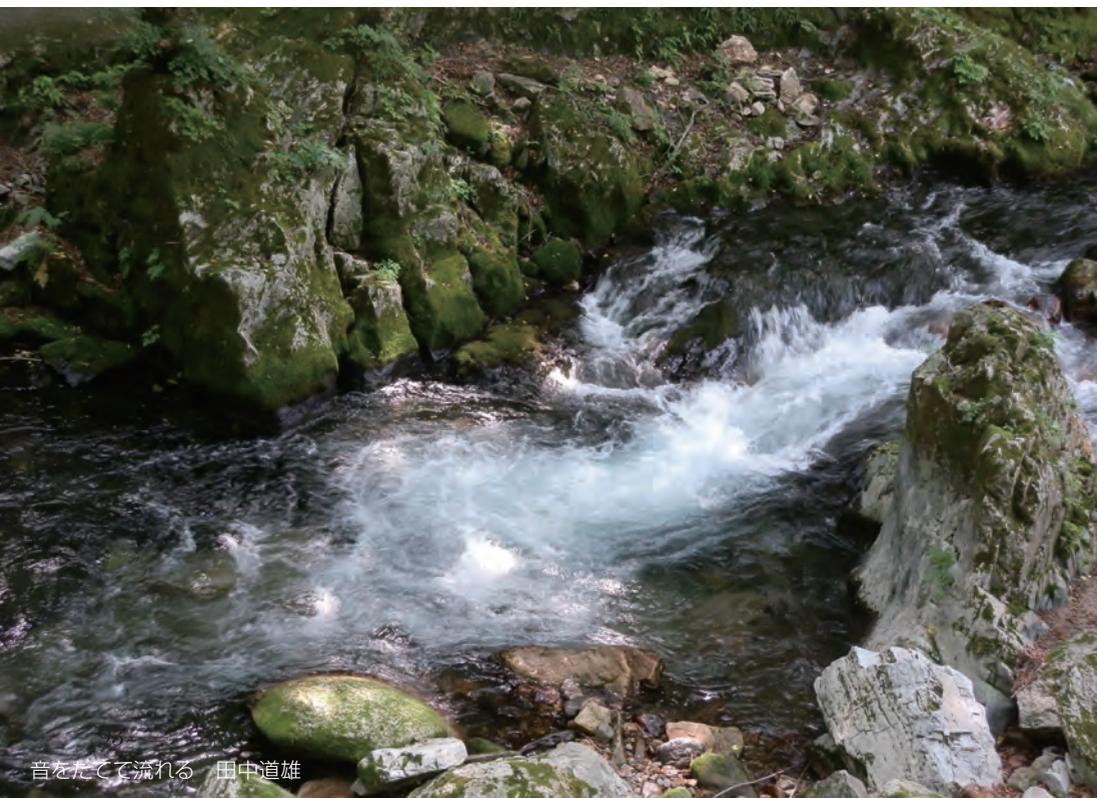
実りの秋 三浦トシ子



92
冬への備え 小成智子



優雅な舞 箱石京子



音をたてて流れる 田中道雄



熊の鼻 加藤雄治





鱒雲 金澤千鶴子



新巻鮭づくり 三浦なおみ



鉄道と稲田 箱石昌彦



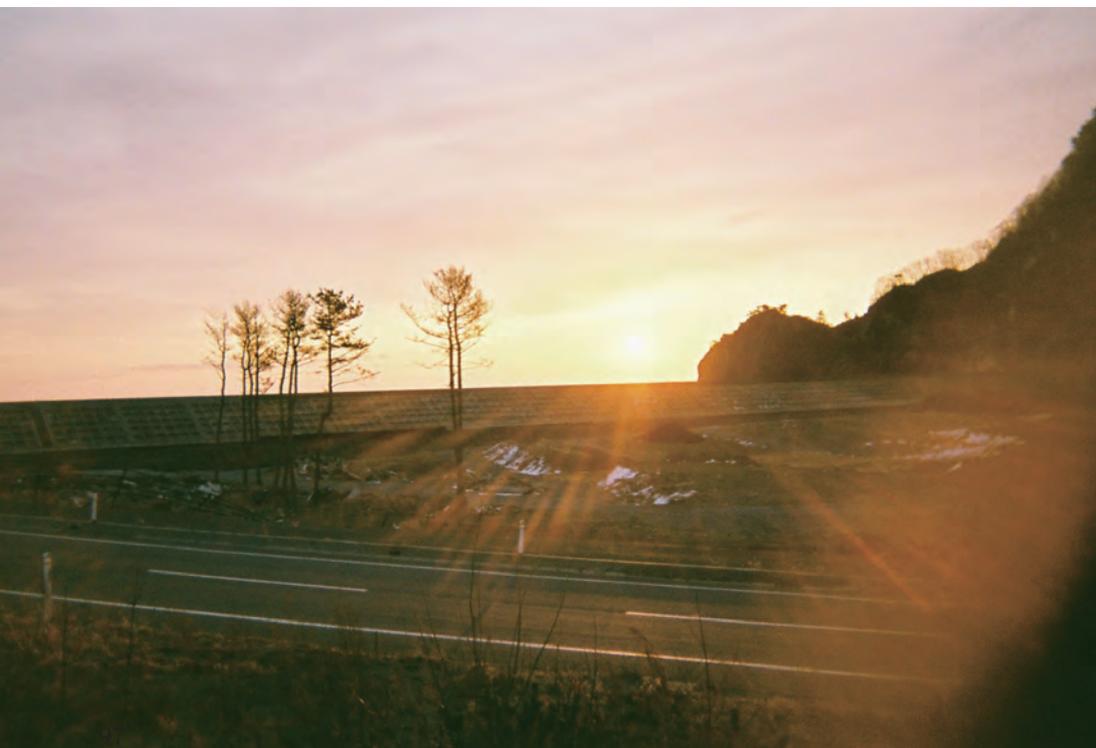
鉄道と稲田 箱石昌彦

復興のきざし





漁のしかけ 佐々木悦子



特別な初日の出 小成智子



鮭が上ってきた 箱石京子



列車が動いた 武田勝麿



がれきの中から 武田勝麿





船出を待つ真新しいサツパ船 三浦浩子





復興を祈って七頭舞のイルミネーション 中村昭





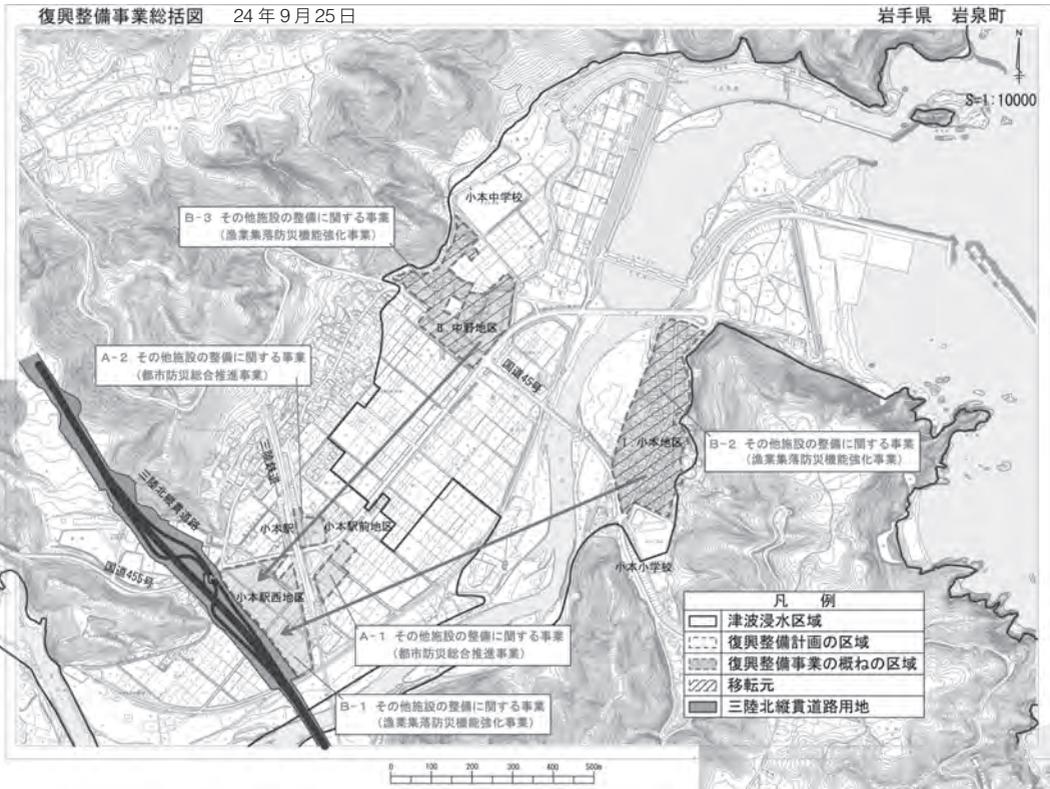
すまし顔の水門 熊谷貴里子



102
浸水地域にも元気に花が… 三浦登紀子

第6章 復興への期待

あの日から2年、復興に向けた歩みは
どこまで進むことができたのか、岩泉町
の中で、岩手県、日本、そして世界の中で、
どのような助け合いがあったのかを振り
返ってみて、これからの小本と岩泉町を
考える。



1. 復興計画と津波への対応と生活再建

復興計画のあらまし

復興に向けた指針策定について審議するために設置された、国の政策会議である「東日本大震災復興構想会議」の基本方針を受け、23年6月から始まった国の直轄調査に基づき、町では「岩泉町震災復興計画」を9月に策定した。小本の5年後は前ページの復興整備事業総括図のとおり計画している。漁港や水門を復旧し、河川堤防につなげる築山堤防を二線堤として津波に備え、昭和8年の大津波で流された家があった地区を松林にしたように、築山堤防から海側には家を建てない計画である。

コンクリートの耐用年数は一般に50〜60年程度であることを考えると、堤防を高くするだけでは津波を防ぐための根本的な解決にならないと町では考える。今回浸水した地区も築山堤防が完成した後は住宅が建てられるように、集団防災移転事業ではなく、漁村集落防災機能強化事業という事業手法を採用した。被災前に住んでいた元の集落に建て直すこ

とど、小本駅近くに高台移転をすることが選択できるとしている。

小本駅周辺には、小本支所や診療所を含む駅舎を兼ねた拠点的な複合施設ビルの建設や、災害公営住宅、高台移転する住宅地、三陸縦貫道を挟んだ中学校、小学校、保育園の新築移転を計画しており、小本の中心部をコンパクトな市街地として形成することを目指している。現在、仮設商店街のある小本字長内に、三陸縦貫道のインターチェンジができる予定もある。

小本駅の防災拠点を核に

計画の実現に向けた事業は、復興課が担当している。24年8月現在は

「現在、小本駅の観光センターであるところに、防災拠点として複合施設ビルを建設します。このビルは、海岸の防潮堤や水門などが何も機能しないときのシミュレーションによれば、2階まで津波が来る可能性があるので、3階を防災拠点にする設計です。仮設住宅小本団地や岩泉森の越が町有地を活用

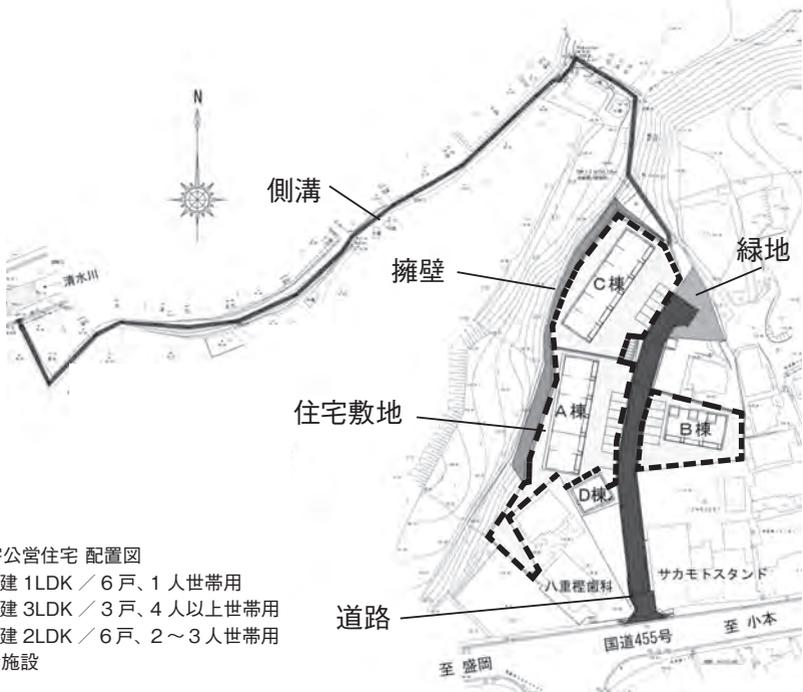
できたのと異なり、築山堤防と高台移転用地には地権者が百人もいる私有地で、その買収交渉が大仕事です。土地の評価額が農地と宅地で差があることを、理解してもらえないことがあります。三陸縦貫道は国道ですが、その用地買収の交渉も町の仕事になります。」(役場復興課)という状況である。

高台移転用地の道路整備や造成工事は3年後の27年3月の完成を予定していて、計画実現に大きな遅れが出ないよう努力を続けている。

計画への対応と希望

23年9月に作成した復興計画は、4月以来、意見交換会やアンケート、地域懇談会などで出た要望等を踏まえて集約したのだが、実現に向けた個別の対応は難しい。「代替地が決まったら早く家を建てたい」と、造成工事の完成を心待ちにしている若い世帯がある一方で、元の集落に残った家もあることから、「どちらに住む人が多くなるか様子をみたい」と決めかねている高齢世帯もある。

商店経営にとっては、どちらに多くの人が住むか



森の越災害公営住宅 配置図

- A棟：1階建 1LDK / 6戸、1人世帯用
- B棟：2階建 3LDK / 3戸、4人以上世帯用
- C棟：2階建 2LDK / 6戸、2～3人世帯用
- D棟：集会施設

は切実で、住居兼用にしたいという要望をもつ場合や仮設店舗に加え、さらに新たな投資を要するか、など心配はいろいろあるが、商店街となる新たな街並み形成に期待もある。



小本仮設団地そばにできた仮設店舗「みらいにむけて商店街」

岩泉町最大の企業である岩手アライ(株)では、三陸縦貫道や光ケーブルの整備に期待を寄せて、復興をチャンスと捉えていこうという意気込みもみられる。農協や漁協は一刻も早く元の生活が戻ることを望んでいて、商工会はこれからの産業として、しばらくは建設業が興隆するのではと予測している。

第三セクターの企業も頑張っており、岩泉ヨーグルトを成功させた岩泉乳業(株)は、夏場の主力商品とするべく、地サイダーも商品化させた。(株)岩泉きのこ産業は販路の拡大をすすめている。(株)岩泉産業開発は、物流の上で三陸縦貫道の整備は岩泉町の産業の発展に寄与すると意欲的に捉えている。

町では、観光産業の振興と交流人口の拡大にも力

を入れており、国指定天然記念物「龍泉洞」をはじめとする豊かな自然や独自の食文化などを生かし、新たな観光メニューを開発し、集客に取り組みべく「観光事業再生計画」を24年3月に作成している。

2. 復興事業の成果とこれから

復興スケジュール

次ページは24年6月に岩手県と町が作成した「社会資本の復旧・復興ロードマップ」である。三陸縦貫道等の道路関係は時間を要するが、他は概ね26年度中に終える計画である。ただし、広大な被災地で、一斉に工事が始まると、建設業者も資材も不足することも考えられるので、整備スケジュールなどは今後、変更の可能性もある。

岩泉町は、小本以外の町内の大部分が津波被害を受けていないため、支援の手が身近から差し伸べられた。東日本大震災では、市役所や町村役場自体が被災して、首長が亡くなったところもある中で、町の復興に向けた動きは比較的早い方である。復興

分野区分	細分項目等	事業主体	路線・箇所名等	事業概要	年度別整備スケジュール									
					第1期（基盤復興期間）			第2期（本格復興期間）			第3期（さらなる展開への連結期間）			
					H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30		
海岸保全施設	一般海岸	県	1 小本川	(三陸高潮)防潮堤 L=0.2km	施工準備(設計等)		防潮堤復旧工事							
			2 小本海岸	(災害復旧)防潮堤 L=0.3km	施工準備	防潮堤復旧工事								
	漁港海岸	町	3 茂師漁港海岸	(災害復旧)防潮堤 L=0.1km 水門 N=1基 他	施工準備(堤防設計等)		防潮堤、水門等整備工事							
			4 小本漁港海岸	(災害復旧)防潮堤 L=0.2km 水門 N=1基 他	応急対策	施工準備(堤防設計等)	防潮堤、水門等整備工事							
復興道路等	復興道路	国	A 三陸沿岸道路	田老～岩泉	(新規)事業準備	測量、設計、用地買収を行い、順次工事に着手(逐次供用開始)								
	復興支援道路	県	B (主)久慈岩泉線道路	龍泉洞	(事業中)	用地・工事の推進(逐次供用開始)								
				大月峠	(新規)	施工準備(設計・用地等)	用地買収	用地・工事の推進						
復興まちづくり	漁業集落防災機能強化	町	a 小本地区	集落道、用地造成他	事業準備	設計・用地等	工事							
災害公営住宅	直接建設	町	ア 森の越	木造 予定戸数：15戸		設計	工事							
			イ 小本駅周辺	木造 予定戸数：38戸		用地	設計	工事						
漁港		県	① 茂師漁港	(漁港災害)防潮堤 L=493m 岸壁 L=280m 他	施工準備(構造設計等)	漁港災害復旧工事								
			② 小本漁港	(漁港災害)防潮堤 L=103m 岸壁 L=844m 他	施工準備(構造設計等)	漁港災害復旧工事								

は「早ければいい」というものではなく、質も問われるが、被災者にとって復興スピードは重要な要素であると考えた結果である。

目に見える復興

被災者が避難所を退所し、仮設住宅に入居したのが23年5月だったが、それから1年半の間に、より生活しやすいように追加の整備が行われた。寒さ対策として外壁に断熱材を取り付ける工事は23年の8～9月に、物置の設置と風呂の追い炊き機能を追加する工事は24年7月～8月に行った。

漁業者は中小企業庁の補助事業を利用し、共同倉庫を建てた。住まいの1階部分を被災した三浦康征さん（小本）は、大工の腕を生かして自宅の改修工事を終え、家族と共に元の生活を始め、共同倉庫を使用して漁業も再開した。

災害公営住宅は、岩泉地区の森の越に建設中で、24年8月に造成工事に着手、10月に



共同倉庫

は住宅の建築工事を発注、25年3月竣工を目指している。小本駅近くに建設する災害公営住宅も、25年1月に造成工事、同年6月に建築工事を開始する予定で進行している。

漁港や防潮堤の工事も着々と進んでおり、茂師漁港は県の管轄で、小本漁港は岩泉町の管轄で復興整備を進めている。24年10月時点で応急対策を終えて漁船が着岸できるようになっており、小本水門の電気・無線設備・モニターカメラ、小本漁港の門扉電気設備、防潮堤、導流堤、北防波堤などが工事中である。

5年間の町の災害復旧・



小本漁港も復旧工事が進む



小本地区災害公営住宅建設予定地



森の越地区災害公営住宅「地鎮祭」

復興総事業費は、延べ2447億円が見込まれている。24年度の岩泉町の一般会計予算が96億円余なので、そのおよそ2・5倍にもなる計算である。

3. 岩泉の発展を共に支える〜岩泉の産業

岩泉の基幹産業

岩泉町は豊かな森と自然に恵まれているが、1960年代をピークに人口減少が続いてきた。人口は最盛期の3分の1近くになり、「町の人口も子どもの頃と比較するとずいぶん減ってきている」と、元小泉乳業の小泉家12代目の小泉好弘さん（中町）は振り返った。小泉家は元々沿岸と内陸の物品の流通手段として南部牛を飼っていたが、明治中頃に小泉家でホルスタイン種を導入したのが岩泉町の酪農の発祥と言われている。

町では、自然を生かした農業、畜産業、漁業、林業が基幹産業として繁栄したが、山の木を焼いた炭を、牛の背に乗せて運んだ時代からの変化は著しく、現在は第1次産業でも、生産地に近い利点を生かし

た製品化を図り、販売に直結する6次産業化が求められると言われている。岩泉町森林組合も昔ながらのマツタケ産地としての利を生かし「岩泉マツタケ」としてのブランド化を図るとともに、その栽培に力を入れている。

暮らしを支える産業は、雇用の基でもあり、地域に住み続けるためにも発展が望まれる。小本には漁業に関わる人が多く、漁業も岩泉町の発展を支える上では欠かせない産業である。

一方、今は産業構造変化を先取りして、サービス業が主体で波及効果のある観光などが、産業として注目される時代でもある。

観光協会事務局長の五日市豊さんは「龍泉洞の観光客等は風評被害により今なお激減している。早く元に戻ってほしい」と語り、今後の観光に工夫や知恵を絞る必要があるとの見解を示し、商工会事務局長の下向秀夫さんは「観光業はホテルだけでなく、タクシーやクリーニング業、土産物などにも及ぶので、商工会としても観光客の増加を重要視している。」と話している

昭和60年3月に誘致企業として当町で操業開始した岩手アライ(株)は自動車部品製造の会社で、全従業員約230人のうち、町出身者の割合は約7割である。この他、4つの誘致企業があり、それぞれ各分野で活躍している。

震災後新たに工場の誘致に応じた2社は、主として水産加工食品の製造で雇用の増加が期待される。

第三セクターの試み

産業振興は町の大きな課題で、民間と協働して出資や人材供給を行い、第三セクターの株式会社をいくつか作っている。(株)岩泉きの



きのこハウス棟



シイタケのバック詰め作業



菌床ホダで育つシイタケ

この産業は平成9年の会社設立時から、菌床ホダの製造・培養から収穫、出荷までの全てを一貫して自社生産しており、24年12月現在は町内3カ所に多くのハウス棟がある。シイタケをパック詰めして、毎日首都圏方面に出荷するために人手が多く必要で、雇用の創出に役割買っている。

岩泉乳業(株)は、町や酪農家、町内の乳業会社が出資して平成16年8月に設立。山下欽也現社長は同社の主力商品であるヨーグルトの売り方などに工夫を凝らして、経営を軌道に乗せた。「質の高さをどうアピールするかが知恵の出どころ



岩泉町の特産品が買える「道の駅いわいずみ」



岩泉乳業(株)の「岩泉ヨーグルト」と「岩泉飲むヨーグルト」

(株)岩泉産業開発の「龍泉洞の水」

だった。」と話した。震災時には流通を止めないよう懸命の対応を行い、取引相手の信用を増した。

(株)岩泉産業開発は、昭和57年に社団法人岩泉産業開発公社として発足した。同社の発足から3年後の60年に龍泉洞地底湖の水が環境庁（現環境省）が選定した「名水百選」に選ばれたことから、当時町内にあった明治乳業(株)の工場で加熱殺菌をし、「龍泉洞の水」として商品化。明治乳業(株)には販売網の確保にも協力してもらった。現在は価格競争の時代になり厳しい販売状況だが、活路を見出すべく道の駅や「ふれあいランド岩泉」の運営、農産加工物の通信販売などを展開し、新たな商品開発も積極的に取り組んでいる。

この他に第三セクターは2社あり、岩泉総合観光(株)が龍泉洞温泉ホテルと龍泉洞園地内の売店を運営し、農業振興公社では堆肥の製造などを行っている。



龍泉洞温泉ホテル

4. 「コミュニティの支え合い」

消防団などの互助組織

災害時にはまずは自助、そして共助、公助が必要といわれる。「共助」にあたる消防団の第7分団副団長の早野善彦さんに震災当時の話を聞いた。

「小本は岩泉消防団の第7分団で、1部から5部まであり、被災したのは1部と2部2班、3部1班です。水門を閉じること、避難誘導、避難指示の広報が活動内容で、トランシーバーで連絡を取り合いました。震災後の1カ月は合宿して被災地区に通い、がれきの撤去作業や不審者の点検などをして、その間女性たちが毎日食事作りをしてくれていました。」

このように周囲との協力体制がしっかりしていることは、都会に住む人には驚かれることも多い。

「公助」の面では、震災発生直後から避難所等への炊き出しを町の職員と社会福祉協議会などが協力して町民会館で行った。また、を担当を保健福祉課に置き、町職員が衣類や日用品の調達に奔走。物流がストップする中で数量の確保に努めた。時間の経

過とともに徐々に物資が行き渡るようになったことと、被災者のニーズの変化で、支援物資の保管の継続も難しくなったことから、半年余の後にバザーをして義援金に換えた。支援物資の処理が各自自治体の裁量に任された結果の知恵でもあった。

ボランティアや寄付・義援金

県立岩泉高校では3月の3日間、小本小学校、中学校の泥出し、田畑のがれき処理のボランティア活動をした。菅野慎一副校長は「社会貢献と仲間意識の醸成に役立ったと思います。役場にバスで送迎を支援してもらったのも有難かったです。参加した生徒には充実感があり好評でした。その後の文化祭では模擬店や父母の協力によるバザーなどをして、僅かですが町に寄付もできました。」と話す。

町全体でのボランティアの状況は3月から11月までで、792人が登録し、派遣延べ人数は2553人になる。うち高校生が154人、中学生17人、町外が181人。寄付・義援金も130を超える町内の個人・団体から集まっている。

若い力への期待

小本の未来を支える子どもたちについて、小本小学校と小本中学校の校長に話を聞いた。両校とも震災による津波で被災。24年1月に、小本小学校大牛内分校敷地内に仮設校舎が完成。元気に通学し、あいさつをする子どもたちは頼もしい。

小本小学校は元の分校校舎を使っており、特別教室がないので廊下に図書室の本を並べている。

「分校は地域の学校という役割があり、PTAは準会員である地域の世帯に支えられている。また、小学校も分校も伝統芸能を授



小本中学校（仮設）



小本小学校（仮設）



小本保育園（仮設）

業に取り入れている。」「岩泉は農業、工業、水産業とすべてを学べる貴重な地域という認識で、自らに誇りを持ち、震災によって深まった横軸連携による支援交流の機会を生かした教育をしていきたい」と、大田勝浩校長は話してくれた。

小本中学校の生徒も仮設校舎で学んでいる。仮設でも自分たちの校舎という意識からのびのびと過ごしている。「盛岡市との交流やボランティアの訪問、台湾からの招待で10日間のホームステイなど、新しい経験をした上で、新巻鮭作りなど従来通りの授業と合わせて逞しく育っている。小本のシンボル龍甲岩にちなんだ『龍甲魂』『龍甲祭』などの言葉で『創造』を意識するようになってきた。」と小野佳保校長は語った。

町内の小中学校でも被災した小本の復興に寄り添うための活動を行っている。安家小・中学校は小本から30キロメートル以上離れているが、「同じ町内なのだから助け合いたい。」と、小学校では空びん回収の収益の一部を、中学校では技術家庭や総合的な学習の時間などで栽培した野菜の売り上げを寄付

している。

大川中学校は震災後の早い時期から支援活動を行っている。23年度は「絆プロジェクト」として募金活動や、仮設住宅や高齢者施設に訪問して劇や合唱などを披露する活動をした。24年度も「一步一步前へプロジェクト」としてボランティア活動を継続。夏には小さな鉢植えを育て、仮設住宅各戸に届けた。生徒たちは直接各戸を訪れて鉢植えを手渡すことで、被災地と被災の体験を身近に感じた様子だった。経験を地域の人と共有することを目的として、感想文を『大川七滝学校便り』に掲載して、地域の人たちにも読んでもらっている。

5. 幅広い交流

ボランティアとの交流

震災をきっかけに、岩泉町には多くのボランティアが訪れた。被災した人が元の生活に戻るまでの期間、少しでも気持ちの支えに役立てばと思つてのことだ。ボランティアは泥出し、がれき撤去、片付け

などから、健康教室、マッサージ、散髪、子どもの遊び相手、傾聴サロンなど多岐にわたる活動をしており、その他、音楽会、映画会、展覧会、カフェなどのさまざまな交流イベントの開催もしている。

仮設住宅に住む人たちからは「コンサートやカラオケが良かった」との話の一方、「仕事で参加できない」という人もおり、イベントを全員が楽しめたというわけにはいかなかった。しかし、交流がもたらした見えない効果は時間を経て実るに違いないと思われる。

「愛ある夢を」(ドリームアーティスト大志代表)が



平原綾香さんのコンサート



子どもの遊び相手のボランティアも訪れた



がれき撤去のボランティアの様子

企画した「富士夢みこし」は、龍泉洞をスタート地点として被災地を南に下り、その途中で子どもたちなどがハンカチにそれぞれの夢を書き、みこしに入れて富士山に担ぎ上げようという企画で、24年7月8日に小本仮設団地で夢を書いたハンカチを集めた。「早く家が建ちますように」「保育園の先生になりたい」などの夢を書くことで、子どもたちも元気が出た様子があった。

姉妹都市との交流

平成7年から国内交流研修事業や産業まつりなどを通じて交流のある東京都昭



富士夢みこしをかつぐ子どもたち
撮影：加藤勝彦



被災地ボランティアガイド
撮影：熊谷典里子



どこでもカフェに集まった人々
撮影：有原真人

島市からは、義援金や物資の提供だけでなく応援職員の派遣、同市医師会からは往診用車両の寄贈があった。同市とは長い付き合いの中から、困ったときは助け合う、信頼関係が育まれており、23年8月6日には、災害時相互応援協定が締結された。今後起こりうる災害時においても互いに応援し合おうと協定を締結したものである。

平成4年に姉妹都市となったアメリカ・ウィスコンシン州デルズ市からも、応援メッセージが届いた。同市とは毎年、学生が互いに訪れ合い、ホームステイなどで交流を深めている。

高知県高知市からは復興事業についての土木建設の専門知識を持つ職員が、半年交代で2人ずつ応援に来ている。人的交流は、すぐには見えない形でも、それぞれに地域情報が蓄積されるので、貴重な財産になる。

交流の発展

交流が生み出すのは人と人との絆だが、それに止まらずに交流の機会を作る事業への発展も可能だ。

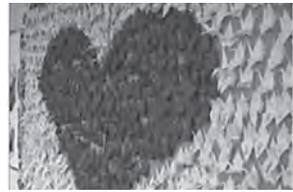
「モシ竜口マン・クルーズ」は震災の2年前に、小本地域振興協議会を中心にプログラムを作り、モニターツアーの受け入れや宣伝活動を行うなどして本格運行に向けた準備を進めていたが、震災により一時中止。その後、24年4月から事業を再開し、本格運行を開始している。漁船で近海を遊覧し、海から小本を体験してもらおうものである。

24年7、8月は40人の申込みがあり、県外からの問合せも多く、好調な再スタートとなった。小本の被災状況や岩泉の情報を発信していくことで外から来た人との交流の場となる。船長は地元漁師がつとめている。船の操縦とガイドの両方で大変だが、小本の復興と、被災の歴史を伝えるために頑張っている。



モシ竜口マン・クルーズ

撮影：熊谷貴里子



昭島市の中学生からのプレゼント
(折り紙ハートフラッグ)

6. 復興に向けて

交流の相互関係

モノも情報も世界を駆け巡る時代になり、自ら発信できるモノや情報がないと流されがちである。だからこそ自分たちの足元を固めることが交流の前提となる。岩泉町を見つめて、優れた点を発見し、生かすためにこそ交流が必要になる。岩泉町の自然や人が生み出すモノや歴史、体験、文化、芸能、等々を通じ、他の地域やそこに住む人、岩泉町を訪れる人と交流して、さらなる発展につなげるために、学び合い、楽しみ合うことで、少しずつでも発信が可能になっていくと考える。

交流の基盤

直接に津波の被害を受けなかった場所でも、被災時に困ったのは、物資の流通不足と通信不能であった。物資の中でもとりわけガソリン不足が問題になった。今や私たちの生活は電気、道路輸送、通信網なしには成り立たなくなっている。利便性の高い

ところに都市の集積が進み、さらに人やモノを集める。都会と田園のメリット・デメリットは交通で補い合うことになった。

復興道路といわれる三陸沿岸道路は、仙台から八戸まで359キロメートルのうち、事業化されていなかった4割にも予算がついた。小本と田老の間も新たな事業化区間に当たる。自動車専用道路なので、全線が開通すれば、宮古と仙台の間がこれまで

で7時間かかったところ、半分で済むことになる。東の玄関口として重要な役割を担うに違いない。

三陸沿岸道路(田老～岩泉)

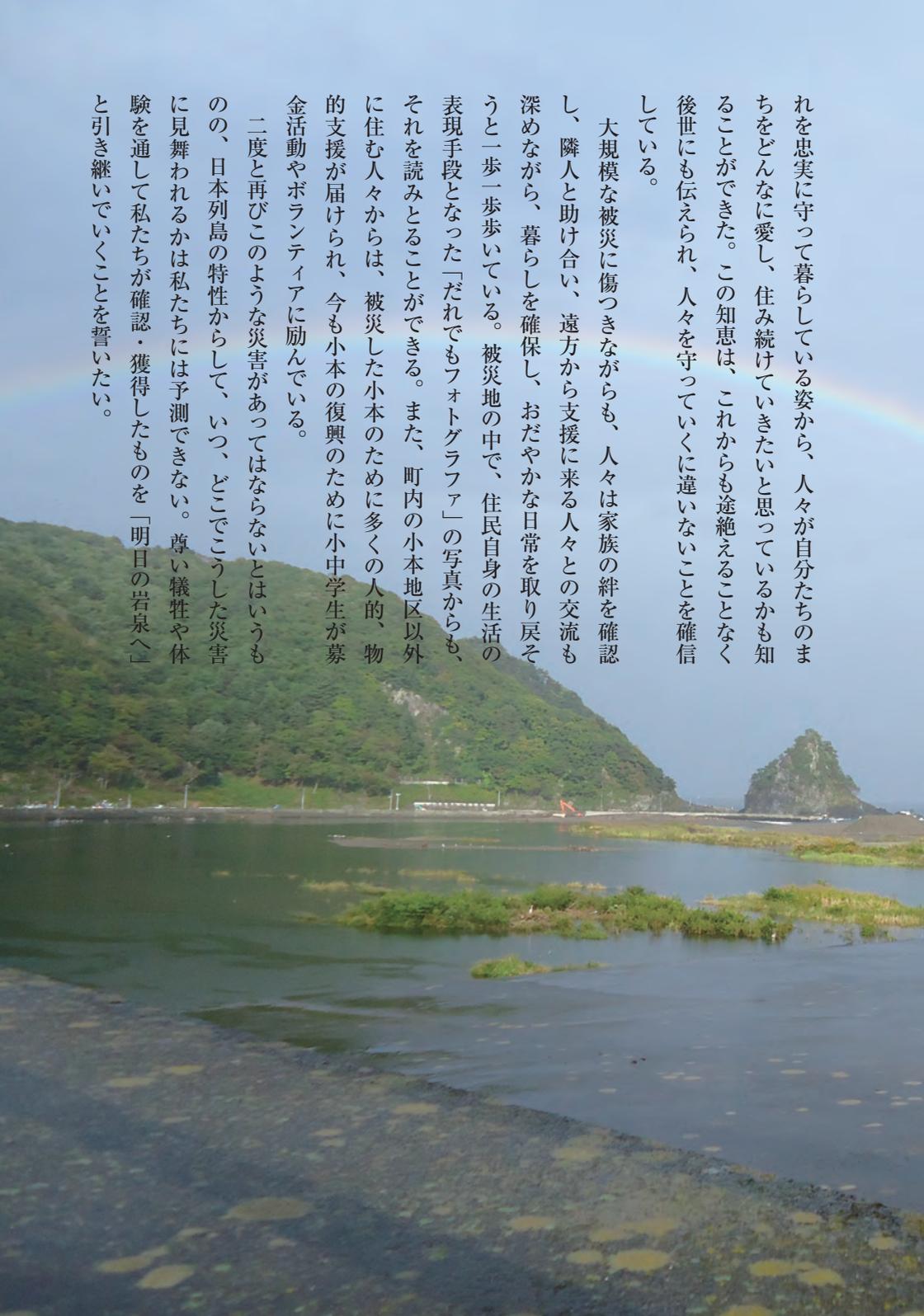


おわりに 明日の岩泉へ

東日本大震災は、被災地が、日本列島の東北部、太平洋沿岸約500キロに及ぶスーパー広域型である上に、地震、津波という自然災害に、原子力発電所の事故が重なる複合災害となった。復興に向けた歩みは緒に就いたばかりで、日本全国、全世界への影響は非常に大きく、今後の巨大地震への対策も見直しが行われている。また、原子力発電を始めとして、目指すべき復興後のまちなみや生活の姿など、近代文明のもたらしたもののものも価値が問われている。

この被災から立ち上がり、復興へと進む岩泉町の姿を、後世に伝える必要性を感じ、被災から二年間の記録集を編集することにした。

たぐさんのインタビューの中で、被災の経験と避難生活、その後の生活の様子が口々に語られた。そこから分かったことは、小本に住む人々には、「防災対策」という言葉では表せないほど自然に、「地震があったらこうする」という習慣が、世代から世代へと伝えられていることだった。また、そ



それを忠実に守って暮らしている姿から、人々が自分たちのま
ちをどんなに愛し、住み続けていきたいと思っているかも知
ることができた。この知恵は、これからも途絶えることなく
後世にも伝えられ、人々を守っていくに違いないことを確信
している。

大規模な被災に傷つきながらも、人々は家族の絆を確認
し、隣人と助け合い、遠方から支援に来る人々との交流も
深めながら、暮らしを確保し、おだやかな日常を取り戻そ
うと一歩一歩歩いている。被災地の中で、住民自身の生活の
表現手段となった「だれでもフォトグラフア」の写真からも、
それを読みとることができると。また、町内の小本地区以外
に住む人々からは、被災した小本のために多くの人的、物
的支援が届けられ、今も小本の復興のために小中学生が募
金活動やボランティアに励んでいる。

二度と再びこのような災害があつてはならないとはいふも
の、日本列島の特性からして、いつ、どこでこうした災害
に見舞われるかは私たちには予測できない。尊い犠牲や体
験を通して私たちが確認・獲得したものを「明日の岩泉へ」
と引き継いでいくことを誓いたい。

協力者一覧—— ありがとうございます!

◆インタビュー等協力

金澤晃	早野和	株式会社西倉工務店
金澤サツ子	三浦健二	岩手県立岩泉高等学校
金澤章子	三浦ツイ	株式会社フロンティアいわいすみ
金澤千鶴子	三浦蘭美	(ホテル龍泉洞愛山)
金澤傳明	三浦康征	株式会社岩泉きのご産業
金澤由江	三田地和彦	株式会社岩泉産業開発
加藤雄治	三田地サカエ	株式会社岩泉総合観光 (龍泉洞温泉ホテル)
小泉好弘	山口守	岩泉乳業株式会社
佐々木悦子		岩泉町立小本保育園
佐々木和子	岩泉商工会	岩泉町立小本小学校
高橋真二郎	岩泉町観光協会	岩泉町立小本中学校
田村八代江	岩泉町社会福祉協議会	岩泉町立安家小・中学校
野崎耕一郎	岩泉町森林組合	岩泉町立大川中学校
箱石豊	小本浜漁業協同組合	岩泉消防団第七分団
箱石和子	JA 新いわて岩泉支所	
橋本和昭	岩手アライ株式会社	大志 (「愛ある夢を」代表)

◆「だれでもフォトグラファ」協力

阿部恵子	工藤良雄	箱石京子
阿部大夢	熊谷真里子	箱石昌彦
阿部大海	小成智子	三浦トシ子
阿部範子	佐々木愛香	三浦なおみ
有原隼人	佐々木一幸	三浦悦子
石黒太一	佐々木悦子	三浦義治
石黒千夏	佐藤憲二	三浦義昭
小原修二	武田勝磨	三浦幸美
織笠清	田中道雄	三浦浩子
加藤勝彦	田村八代江	三浦登紀子
加藤雄治	田村美夏	三浦忍一郎
加藤和樹	田村千美	山口有稀音
金澤清香	田村美智	
金澤千鶴子	長崎基一	橋本照高
金澤卓也	中村昭	八重樫定津彰 (精岩堂)
金澤玲奈	野崎淳志	富士フィルム株式会社
上下純一	箱石チカ子	UIFA JAPON

◆写真協力

平野正秀
和野浩也
株式会社生活構造研究所

敬称略

明日の岩泉へ 東日本大震災 岩泉町復興の記録 その1

発行日 平成 25 年 3 月 11 日

発 行 岩泉町

岩手県下閉伊郡岩泉町岩泉字惣畑 59-5 電話：0194-22-2111

編 集 株式会社生活構造研究所

東京都千代田区麴町 2-5-4 第 2 押田ビル 電話：03-5275-7861

協 力 UIFAJAPON (国際女性建築家会議日本支部)

レイアウト 朝倉恵美子
